550
129

始

2. 6.21

西郷南洲

逸話
畧傳
訓話
詩文
書簡

550
129.4

パンフレット

鹿兒島城山
南洲翁洞窟
南洲會発行

530-129/イ

城山パンフレット

西郷南洲

發行所　鹿兒島城山洞窟南洲會
印刷所　鹿兒島縣教育會印刷部

大正
15. 11. 20
内交

目次

一、略傳

一、誕生及び誕生地
二、家系及び其の幼名
三、巨眼如愚の少年
四、其の家庭
五、交遊と修養
六、島津家騷動とその刺戟
七、齊彬公の襲封と南洲
八、藤田東湖と南洲
九、井伊直弼の就職と南洲

一〇、齊彬公薨去
一一、安政の大疑獄
一二、南洲月照と共に薩摩に下る
一三、流滴三年
一四、島の御師匠
一五、南洲召し還さる
一六、南洲獨斷大阪に入る
一七、寺田屋騷動
一八、德之島に流さる
一九、更に沖永良部島へ
二〇、再び島を出でざる覺悟
二一、迎への汽船到る

二二、長州征討と南洲
二三、王政復古と戊辰戰爭
二四、江戸城の開城と南洲
二五、南洲故山に歸る
二六、南洲更に朝に入る
二七、征韓問題
二八、私學校創立
二九、西南の役

二、逸話事蹟其他

◆輕卒に皇室を語らぬ南洲
◆身邊は自ら始末して

◆父母の命日を忘れず
◆從僕を見舞ひて
◆南洲嘔吐して席を汚す
◆斷腸の思ひを忍んで
◆我は万兵の將たらんのみ
◆南洲は巨鐘の如し
◆君臣水魚の交り
◆齊彬に一喝された南洲
◆薩南の寵兒
◆白面の青年と見て侮り
◆扶持米を割きて貧民へ
◆井伊大老の要撃に雀躍す

◆何といふ情け者じや
◆余は君命に背くを好まず
◆獄中の南洲
◆おい汚れ飲まんか
◆增築が氣に入らぬ
◆仕方なき人物
◆慈母の如くに南洲を慕ふ
◆長袖者流役に立たぬ
◆汝等が死んだ頃に
◆敗者を追ふは武士に非ず
◆次弟の死に泣き明す
◆江戸城の晝寢

◆乳臭兒の後藤象次郎
◆賞典を奉還して
◆位は役に立ち申さぬ
◆家賃參圓
◆南洲の居宅
◆懷中より取出した參拾金
◆余が愛妾
◆土持政照を揶揄す
◆人を叱るの値なし
◆遠島の事を語るは苦痛じや
◆わしは大庭園を持つとる
◆何しに行くのじや

◆東京引上の當時
◆公義に厚き人
◆私學校を創立して
◆受領せぬ休職給
◆汝の顏人糞を厭ふの資格なし
◆馬を追ふて歸る
◆下駄の緒を結んでやる
◆飯櫃の下に紙幣
◆南洲と私學校生徒
◆弊衣の光
◆芋連と腐芋連
◆汝等は余が訓を忘れたるか

◆早く歸りて人心を鎭撫せよ
◆あゝ吾事終れり
◆南洲を信ずる弟從
◆田の浦の哀別
◆舊藩主島津邸前
◆兩手を地について
◆戰線を擴ぐべからず
◆斃れて後やむべし
◆邊見十郎太に木刀
◆英雄に閑日月あり
◆軍事は汝に一任しあり
◆山縣有朋の書

◆終焉の日の南洲
◆南洲の首級と官軍諸將
三、訓　話
四、書　簡
五、詩　文

一、畧　傳

一　誕生及び誕生地

南洲、西郷隆盛は、文政十年十二月七日、鹿兒島市加治屋町に生れた。父は吉兵衛と云ひ、薩藩の勘定方小頭なる微職を勤めてゐた。母は椎原權兵衛の女、名を滿佐子と稱し、吉兵衛との間に四男三女を擧げた。長は吉之助（南洲）次は吉次郎（戊辰役戰死）三男愼吾（後の從道侯）四男小兵衛（明治十年役戰死）長女は公爵大山巖の兄彦八に、次女は市來六左衛門に、三女は市原傳右衛門に嫁いだ。

二　家系及び其幼名

其家系は、もと南朝の名臣肥後の菊地武光より出で、武光七世の孫武盛の代に薩摩に移り、元錄年間西鄕九兵衛の代に始めて島津家に仕へた。その玄孫を吉兵衛と稱し、容貌魁偉、膂力衆に優れ、人、綽名して無敵吉兵衛と呼んだ。其子同名吉兵衛は、卽ち南洲の嚴父である。南洲の幼名は小吉と云ひ、後善兵衛と稱し、又、吉之助と改めた。而して名乘りは隆永と稱し、後又、隆盛と改め、南洲と號した。僧月照と入水して大島に流さるゝや、幕府へ憚る處ありて菊地源吾と稱し、又、大島より召還さるゝや、大島三右衛門と改稱した。最後の沖永良部島謫居中は武雄と稱し、屈蟲と號した。當時の詩歌又は揮毫等には、斯別名別號を署したるものがある。

三　巨眼如愚の少年

南洲は、幼少の頃より軀幹肥大、一見鈍愚の如くであつたが、蛇は寸にして人を呑むとかの譬への如く、總べての動作に凡庸兒の企て及ばぬ處があつた。彼は常に默々として無駄口を利かず、口を開けば其一言は實に九鼎よりも重しとせられた。又、肥大なる豐頰には常に微笑を含んでゐたが、一度怒る時は、刀を按じて敵を屈伏せざれば止まなかつた。故に年長者と雖も心中密に驚嘆してゐた。

四　其の家庭

家庭はいたつて睦まじく、南洲は特に弟愼吾を愛する事一通りでなかつた。然し時に、兄の訓戒を聞き入れぬ場合は、力まかせに踏みつけて

懲戒するのが常であつた。微祿で貧しかつたその家庭は、子供多き爲め不自由勝ちであつたが、南洲自らは少しも意に介せず、讀書講武の餘暇には附近の山林に薪を採り、又は、炊事其他の手助けをして母を慰めた。斯くした事情の爲め、南洲は早くも自給自修の道を講ぜねばならぬ身となつた。時に南洲は十五才であつた。

五　交遊と修養

南洲は夙に横山安之丞に就て漢籍を學び、伊藤茂右衛門に陽明學を、猶進んで當時有名な福昌寺の碩學無參和尙に從て峻嚴な禪の指導を受けた。その當時の交遊は、大久保市藏（利通）有村俊齊（海江田信義子）伊地知龍右衛門（正治伯）吉井幸介（友實伯）等であつた。

六　島津家騷動とその刺戟

南洲が、郡方書役として其職に勵みつゝある間に、薩藩には一椿事が持ちあがつた。それはかの有名な御由良騷動である。薩藩二十七代の領主を島津齊興と云ひ、齊興に、齊彬、齊敏、久光の三子があつた。齊彬齊敏、は正室に生れ、久光は側室御由良の生むところであつた。次子齊敏は早く備前岡山の城主池田齋政の養子となつた。

嘉永二年、南洲、二十三才の時、藩主の繼嗣問題が起つた。齊興は年耳順に達するも未だ家督を讓らず、斯時長子齊彬は年旣に四拾に達してゐた。齊彬は賢明の譽れ頗る高く、水戶烈公、伊達宗城、松平春嶽の諸侯から推重され、藤田東湖、佐久間象山、高野長英、渡邊華山等の志士俊傑其門に出入して一方勤王黨の重望と勢力とを負ふてゐた。然るに幕

府の鼻息を窺ひ、無事を旨とする薩藩内の守舊派(即ち俗論黨)國老島津將曹を始め、調所笑右衞門、吉利仲、伊集院平、二階堂靜馬等は、齊彬の聰明と、志士の出入を憚り、一は側室御由良の歡心を買はんため、齊彬を廢して、弟久光を擁立せんとし、奧向きの勢力と相結んで陰謀を企てた。是に對して、江戸詰家老島津壹岐、物頭赤山靱負、鹿兒島奉行近藤隆右衞門等の尊王主義の改新黨は大に憤慨して、密に高崎五郎左衞門大久保次右衞門、山田市左衞門等の同志を集め、事を未然に打破せんとした。

斯久光の生母御由良の方は、もと高輪の遊船宿の女であつたが、藩士岡田小藤次の養女といふ名義にて齊興の側室となり、寵愛頗る厚く隱然奧向を左右してゐた。故に幕府の鼻息を窺ふ守舊派の徒は、奧向の歡心を買はんとする者と相寄りて嗣子齊彬の排斥を企てたのである、之に對する赤山、高崎、大久保等の人々は、長子齊彬を立て、以て血脈の正統を期せんとする精神よりでたのであつた。然るに不幸なる哉、改新正義の士は、激昂の餘り過激手段を執り、側室御由良を始め、守舊派を暗殺せんとし、其謀事破れて却て奸臣等の讒に逢ひ、赤山始め一同は、嘉永二年十二月六日切腹を命ぜられ、その他の部下は遠島幽閉の處罰を受けたのであつた。其日赤山靱負は南洲を側近く招きて「余等の赤心通ぜずして死するは誠に遺憾。されば汝等は余等の意志を繼いで、奮闘努力せよ」と、血痕したゝる其肌衣を南洲に與へ、以て彼の志氣を皷舞激勵した。斯悲痛なる訓戒は、いかに強く南洲の頭腦を刺戟した事であらうか。殘燈明滅、四隣寂として聲なき夜、血染めの肌衣を抱き、悲痛なる訓戒と、白刄の光景を想起し來りて、慟哭感奮し、血肉奮ひ起りていかなる艱難もいかなる辛苦も何かあらんと勇奮するのであつた。

七　齊彬公の襲封と南洲

繼嗣問題は御由良騷動のため、一時正義派の敗となつたが、斯椿事は、薩藩青年子弟の士氣を興奮する事非常であつた。即ち井上出雲等は密に藩を脫して筑前黑田侯の保護を賴み、次で齊彬と親交ある阿部閣老の耳に入り、遂に將軍の上聞に達し、將軍は齊興に朱塗の茶器を贈つて隱居を諷示した。齊興漸く悟る處あり、嘉永四年正月退隱し、賢君齊彬起て其封を繼いだ。齊彬は本邦外交の先覺者にして夙に開國を主張し、尊王の志厚く、常に人材の養成に心を用ひてゐた。安政元年正月、齊彬は江戶初登りの途についた。南洲は心中密に期する處があつたのか、切に願つて一行に加はり、齊彬に謁見せんものと、日夜焦慮してゐた効あつて、江戶に上るや早々庭方役に採用せられた。即ち庭方役は、庭園の

手入に從事する鄙賤の職ではあつたが、齊彬と會見するには實に好都合の職であつた。日ならずして齊彬は、南洲の偉材なるを知り、兩者の關係は水魚も只ならぬ間となつた。嘗て齊彬は、松平春嶽に向ひ「家臣多けれど、その用ゆべきは只一人西鄕のみ」と云ひ、又、南洲は人に向つて「余は齊彬公に謁する時は、論談花咲きて意氣相投じ、余は君たるを忘れ、君公は家臣たるを忘れらるゝ事度々なりき」と、云ふ程であつたといふ。

八　藤田東湖と南洲

當時水戶に勤王黨の領袖藤田東湖がゐた。全國の志士其門を訪ね、勤王黨の崇拜の標となつてゐた。薩藩士海江田信義も屢々其門に出入して

ゐたが、一日東湖は信義に向ひ、「貴藩主齊彬公は天下の名君である。勇將のもとに弱卒なしの例にもれず、定めし貴藩には名士多からん」と云つた。そこで信義は安政元年の春、南洲に紹介狀を與へて、東湖との會見を爲さしめた。東湖は一見して南洲の大人物なるを看破し、茲に兩雄は意氣相投じ、肝膽相照すに至つた。その日東湖は、盛に酒を勸めて互に痛飲淋漓したが、南洲は酩酊度を失し、はては座席に嘔吐を放瀉して、平然、東湖と談笑した。東湖は其豪宕にして木納なるを愛し「將來日本の國運を負擔し得る者は、一人斯快男兒あるのみなり」と、激賞し爾來、深交を結んだが、安政二年十月二日、江戸の大地震に、慘死してしまつた。是實に當時勤王黨の大打擊であつた事は云ふまでもない。斯計報、南洲のもとに達した時「あゝ、天は何故にかゝる英傑を空しく奪ふのだらうか。吾人の計劃は茲に全く水泡に歸した。」と、愁嘆久しふしたといふ事である。

九　井伊直弼の就職と南洲

當時、幕府の執權者は二十五才にして閣老となつた阿部伊勢守正弘であつた。（福山大守）

彼は時勢人心の趣向を察し、尊王主義の輕んずべからざるを知り、所謂公武合体論の先聲を發した。而して之に援助して力を盡したるは、水戸侯德川齊昭を始め、薩州侯島津齊彬、越前侯松平春嶽、尾張侯德川慶勝肥前侯鍋島閑叟、土州侯山内容堂、筑前侯黑田長溥、宇和島侯伊達宗城の諸侯であつた。これに阿部閣老を入れて世に九明侯と稱した程で、一方、公武の結合に心を注ぐと同時に、人材を弘く登用して實際政治に當らしめ、内外の庶政を革新せんと企てたのであつた。而るに安政四年六

月、公武合体論の柱石阿部閣老は卒去した。茲に於て九明侯の畫策は全然水泡に歸したのみならず、井伊大考の就職によつて俄然天下の形勢は一變した。彼は幕府最後の大暴壓政治を行つたのである。先づ就職と同時に九明侯の蟄居を命じ、又、專斷をもつて米國と假條約十二條を結び同一の條約を、オランダ、イギリス、フランス、ロシアの各國と訂結した。又、十三代將軍家定は多病にして儲君を得るの望がなかつたので、公武主義、尊王主義の者は、豫め、水戸齊昭の子慶喜を嗣として公武の一致を計らふとし、又、佐幕黨の者は、紀伊家の當主慶福を迎へて威嚴を張らんとする密謀を運らしてゐた。されど、敏慧なる島津齊彬は早くも斯密謀を看破し、南洲に旨を授けて京師にとまらしめ、專ら注意を怠らなかつたが、井伊の大老となるに及び、疾風の如く紀州より慶福を迎へて將軍の世子たる事を公表し、次で家定薨去するや、直に之を擁立して十四代將軍とした。家茂即ち其人にして年齡僅に十三であつた。井伊大老の高壓政治は斯く先づ外交に發し、更に將軍繼嗣問題にあらはれた。南洲は、井伊の就任に胸を痛めつゝ、匆々鹿兒島に歸り、齊彬に謁して形勢の一變を陳べ、且つ、形勢茲に到りては、須らく大兵を率ひて京都に出で、尊王の大義を明にして國家の方針を定むべき事を詳述した。明敏敢爲の齊彬は、一諾之を可とし、密旨を與へて直に鹿兒島を立たせた。南洲は途次筑前藩主黒田長溥に謁して密に齊彬の旨を傳へ、京都に入りて齊彬の入京を一日千秋の思で待て居た。

一〇　齊彬侯薨去

而るに、何ぞ圖らん齊彬は、炎暑を冒して兵を閱した爲め、俄然病に倒れてしまつた。この訃報は眞に尊王黨にとりて青天の霹靂であつた。

南洲の大計劃は玆に全く水泡に歸し、失望の深淵に沈んだ結果は、倉皇歸藩して殉死せんと決心したが、早くもそれを看取した勤王僧月照は、殉死の不可を論じ、辛じて南洲の心を翻へさせたのであつた。斯く彼が滿幅の經綸は、不幸中途にして挫折してしまつたのみならず、井伊の高壓政策は、齊彬の薨去を好機として益々猛烈を加へた。井伊は惡魔の如き手を擴げて、一擧尊王黨を撲滅せんと決心したのである。

二　安政の大疑獄

安政五年九月、大老井伊直弼は、京都所司代酒井忠義に命じて非常線を張り、戒嚴令を施行した。九月七日、梅田雲濱が捕へられた。次で賴三樹三郎、藤森恭助、鵜飼吉左衞門及び同幸吉、水戸に在りては、安島帶刀、茅根伊豫之介、日下部伊三次、長州藩士吉田松蔭、江戸にありては、がの有名なる橋本左内以下勤王の志士が續々捕へられ、悉く之を小塚原に斬殺した。無論南洲も月照も亦捕吏のせまる處となり、今や身の置く處なき有樣となつてしまつた。

三　南洲、月照と共に薩摩に下る

南洲、月照、有村俊才（海江田信義）等、捕吏の急追甚だしければ、船路遂に馬關に出で、南洲は一先づ月照を博多に留め置きて鹿兒島に歸つたが、當時薩藩は忠義侯封を襲ぎ、齊彬の弟久光が後見となり、佐幕派の巨魁たる島津將曹等が再び勢力を握り、情勢全く一變してゐた。されば月照を薩摩に潛伏させ置くは虎穴に入れ置くも同然なりと、南洲獨り苦慮する間に、月照は捕吏の追跡を受けて博多にも居たまらず、折りから來合せた平野次郎(國臣)と共に薩摩に入つた。藩廳にては、月照來

れりとの密告を受くるや、幕府の後難を懼れて、速に月照を伴ひて日向に入るべしと南洲に命令した。然しこれもとより、南洲の忍びざる所、苦悶懊惱を重ぬる間に、早くも月照は南洲の意中を察し、天下廣しと雖も、もはや余の身を置く處なし。願くば、足下の刄をもつて速に余が命を斷てと、南洲に歎願した。然し多情多感の南洲、いかにして之を承知するものぞ。死なば諸共とは彼が刎頸の友に酬ゆる只一つの手段であつた。乃ち安政五年十一月十五日、錦江灣上波靜かなる處、天下の快男子南洲と、一代の傑僧月照とは相抱きて入水したが幸にも平野次郎等の手によつて救ひ上げられ、介抱の結果南洲は生氣を吹き返したが、月照の魂は遂に還らなかつた。

相約投淵無後先。　豈圖波上再生緣。
回頭十有餘年夢。　空隔幽明哭墓前。

これ南洲が、月照の十七年忌に、彼の墓前に捧げて悲痛哀慟の涙を注いだ詩である。

一三　流謫三年

跼天蹐地、遂に身を置く處なき悲慘の境隅に陷つた月照の爲めに、友愛默しがたく相擁して薩摩潟に投じたが、南洲一人は幸か不幸か生氣に還つた。斯報藩廳に達するや、佐幕派の者は、幕府に對し憚る所あり、速に切腹を命ずべしと主張したが、老君齊興尙生存して斯間の事情を諒とし、俗論を排して表面水死せりと幕府に報告し、名を菊地源吾と改めて、安政五年十二月三十日鹿兒島の南方百八十浬の大島に流さるゝ事になつた。かくて流罪の人源吾は、翌年正月十二日大島に着し、龍鄕村の土民劉佐民の家に寄遇する事になつた。

一四　島の御師匠

身は絶海の孤島に流されたが、薩藩よりは特別の取計らひを以て、一年十八俵の扶助米を送るなど、普通の流罪とはその趣きを異にしてゐたので、修養のかたわら、頼まるゝまゝに土人の子供に讀書を敎へなどした。村民は日ならずして南洲を敬慕し、偉人の德化は幾許ならずして全島に及んだ。やがて村民は南洲のために一戸を建て、劉佐民の女愛子を容れて炊事汲水の勞を執らせる事になつたので、南洲は一意專心子弟の教養に力め、子弟は日々增加して宛然一ヶの寺小屋の觀を呈し、島の御師匠樣と敬稱されて日を送る内、世は猫の目の如く轉變して行つた。

一五　南洲召し還さる

万延元年春三月、幕末の魔人井伊大老は、水戸十有七士の爲に櫻田門外に斬られた。これより幕府の威嚴は地に墜ち、再び尊王黨擡頭の時勢とはなり、而も先によしとせられた公武合体論も、井伊大老の高壓政策の反動を受け、今や時代後れの迂論とさるる世となつて來た。薩藩にては老君齊興既に死し、藩主忠義の實父久光か執政し、藩老には尊王主義の小松帶刀が就任し、大久保、伊知地等が側役を務めて、次第に藩內の佐幕黨を壓して來たので、先に漸進主義をとつてゐた久光も時流の刺戟を受け、彌々强固な改革主義を提げて上京する事になつた。久光の上洛は上國に雲集せる勤王浪士の歡呼して迎へんとする處であつたが、浪士を指揮し、斯難局を處理する人材が薩藩には缺けてゐた。茲に於て藩論一決大島の南洲を起たしむる事になつた。斯くして南洲は文久二年二月十二日薩摩に還り、名を大島三右衛門と改めて、愈々乾坤一擲の大活躍

を試みんとしたが、將に上洛せんとする久光の意見が阿部閣老時代の公武合体論と殆ど撰ぶ處なきを知り、久光の使命を危んで、上洛を阻止せんと大に之を諫めたが聽かれず、藩命止むを得ずして京師に出で運動する事になつた。これ南洲の本意でなかつた事は勿論である。

一六　南洲獨斷大阪に入る

南洲が胸襟を披瀝しての諫言も、久光の容るる處とならず、久光は一千餘名の兵勢を引き連れて鹿兒島を發し京都に向つた。是より先、鹿兒島を發して下關に久光を待つてゐた南洲は、京洛の浪士が、久光の出發せし事を知り、久光を擁して討幕の先驅たらしめんと犇めき合ひつつありとの急報に接し、久光の意見を問ふ暇もなく、急遽下關を發して大阪に入り浪士の鎮撫に盡力した。然し久光は、君命を待たずに大阪に入り而も、浪士に推されて討幕の首領となるとは何事ぞと一部の風說を信じ、且又、佐幕派中山等の讒言も手傳ひ、次の四罪をもつて即時歸國を命じた。即ち

一、浪士と計りて奇策を立て候事
二、年少の士を煽動致し候事
三、久光侯の滯京相計り候事
四、下關より大阪に飛出し候事

第四罪はとも角、他の三つは全く寃罪であつたが、一言辨解の機會も與へられず、同罪に問はれた村田新八、森山新藏と共に南洲は歸園の途に就いた。しかして南洲が鹿兒島に歸着せると同時に京都に一騷動が持ち上つた。

一七　寺田屋騷動

先に南洲が、久光に諫言せる先見は誤たず、血で血を洗ふ慘劇が突發した。かの有名な寺田屋騷動がそれである。はじめ、鶴首して久光の上洛を待つてゐた京師の浪士は、意外にも久光の意見が、既に時代後れの迂論とされてゐる公武合体論であつたので、浪士の面々は今や、久光の意志を問ひて事を爲すの要なし、須く浪士相應じて兵を擧げんと、血氣の志士は伏見の船宿寺田屋に集合した。久光は之を聞き、大に驚きて大山格之助(綱良)以下七人の刺客を遣はし、不意に寺田屋を襲擊させた。斯の意外なる出來事の爲に有馬新七以下薩藩の重要なる人材が悉く非命に斃れた。之れ一は南洲に寃罪を負はせて故國に追放した結果であつたといふ。

一八　德の島に流さる

先に大島に流されて赦免せられたる南洲は、一月餘にして再び同一の運命に遭逢した。南洲は鹿兒島城下に入るを許されずして、その儘山川港より德之島に流さるゝ事になつた。同寃罪の村田新八は鬼界ヶ島に流され、又、森山新藏は、その子新五左衛門の寺田屋に橫死せるを聞き、人世を絕望して船中に自刄した。

一九　更に沖永良部島へ

軈て久光は歸藩の後、南洲の消息を聞き、德之島に流すは處分未だ輕きに失するを以て、更に沖永良部島に移し牢居させよと、嚴命を下した、沖永良部島は、薩藩の重罪人を放逐する處にして、殆んど生還せし

者なき孤島である。幽閉の後は流石の南洲も日毎に憔悴して昔日の勇氣を見る事は出來なかつたが、その人格の光は、行く處隣人を德化せざるなく、忽ち、在番役土待政照等の景慕する處となり、家屋を新にし、又滋味を送つて南洲の保護に留意し、生氣を養ふ事が出來る樣になつた。

二〇　再び島を出でざる覺悟

然し、流石大忍大度の南洲も、今回の冤罪に依りて再び島を出でざる覺悟を決めた。彼は其心事を書簡に記して

「大島に罷在り候節は、今日は今日はと相待ち居候故、癇癪も起り一日が苦になり候處、斯度は斯島より二度と出で申さずと諦め申候故、如何な苦も無之安心なものに御座候。若し惑亂に相成候へば、その節は罷り登るべく候へども、平生に候はゞたとひ御赦免を蒙りても、滯島相願ひ可申含に御座候」

と、鄕里に書き送つた程であつた。然し、英國軍艦の鹿兒島砲擊を傳へて來た時は、切齒扼腕して無念に思ひ、遂に脫島して報國の微衷をつくさんと決心したが、まもなく、便船ありて英艦敗走を傳へたので、欣喜おくところを知らず、脫島の決心を捨てた。斯くして南洲が、沖永良部に呻吟せる間に、天下の形勢は實に走馬燈の如く急轉して行つた。

二一　迎への汽船到る

時勢の推移は、先に南洲が久光に上言せし通り適中して、久光の抱懷せる幕府改革論は、尊王黨の爲めに覆されてしまつた。それは長洲藩の尊王黨が、浪士と相呼應して大活躍を試みたからだつた。尊王黨の勢力は玆に於て旭日の如く輝いて來た。然るに形勢は又もや急轉し、京都守護

職たる會津侯松平容保は、巧に久光の公武合体論を利用し、薩藩の長藩に對する反感を煽動して、會津、薩摩の同盟を計り、公卿間に暗中飛躍して皇城九門の守衛を會薩二藩に命じ、一夜の間に長州尊王黨を宮中より一掃してしまつた。茲に於て、三條實美等の七卿は、長州に落ちのびる事になつたのである。薩藩守舊派即ち佐幕黨の者共は、內心之を喜んだであらふが、然し事實は薩藩が幕府の爲に籠蓋されたと同一であつた。斯くして時勢の推移に、薩藩勤王黨に於ては、再び南洲蹶起の必要に迫られて來たので、小松、大久保等、眞面目なる一團体が、南洲赦免に運動し、幸に許されて、藩廳では汽船胡蝶丸を購入し、吉井幸介等を召還使として沖永良部島に派遣し、南洲を迎へた。時に元治元年二月二十二日であつた。

三　長州征討と南洲

七卿の長州落ち以來、長州尊王黨は時勢の非なるを慨するあまり、各地に亂を起した。斯變局後、長州は朝敵の如き窮境に陷つたので、長州家老福原越後等、大兵を率ひて伏見に出で七卿の罪を許されん事を朝廷に歎訴した。幕府は會津桑名の兵を集め、同時に薩州に出兵を要求した。之より先、南洲は旣に薩藩軍賦役を命ぜられて京都に在つたが、幕府の出兵要求を拒絕して曰く、これ會津と長州の私闘なり。薩州のあずかり知る處に非ずと、斷然應じなかつたが、長州は薩藩を疑ふ事甚だしく、明かに敵對行爲を示し、遂に戰鬪を開始した。そこで南洲は激戰苦闘、會津桑名の兵と共に、禁闕を守護して蛤御門に長州兵を擊破し、之を敗走せしめた。戰ひ終結するや、南洲は幕命を奉じて單身長州に使し

降伏條件を要求してその目的を達したが、幕府は、南洲の長州に對する處置寛大に失すとの理由のもとに、再び征長の師を起し、慶應元年五月十六日、將軍家茂自ら兵を率ひて長州に向ひ、再び薩藩に向つて長州征討の兵を要求して來たが、南洲はじめ勤王黨のものは絕對之に應じなかつた。それのみか、長州の形勢は既に一變して、高杉東行、山縣狂介(有朋)等の率ゐる精兵が、斷然幕府と一戰すべく待ち構へて居り、裏面に於ては、土佐の坂本龍馬、中岡愼太郎等が、薩長の同盟に奔走してゐた時であつたので、幕軍は散々に敗北して引き上げた。斯く幕府は自滅の第一步に足を踏み入れたのであつたが、その翌年には十四代將軍家茂、大阪城に病歿し、一橋慶喜が後を嗣いだ。斯年十二月二十八日、孝明天皇陛下御登遐あらせ給ひ、不世出の大帝明治陛下が、御年十六才にして大統を御繼承遊ばされた。

二三　王政復古と戊辰戰爭

慶應三年正月九日、新帝の御登極を迎へた南洲は、斯月下旬鹿兒島に還り、兵を率ひて上洛し、薩長藝三藩の攻守同盟を締結しだ。慶應三年十月十四日には、討幕の密勅が薩長二藩に下り、將軍慶喜は是と同日に大政の奉還を朝廷に願出た。朝廷にては直ちに之を御嘉納あらせられ、越へて十二月の九日王政復古の大詔は、堂々天下に渙發された。同時に會津侯松平守護職は罷免され、三條實美卿以下の入京を許し、翌十日には宮中最初の大會議が開かれ、幕府處分の重要なる議題が上つた。斯時將軍慶喜は會津桑名の兵に護られて二條城にあつたが、京洛の地に異變の勃發するを憂へ、十三日大阪に下つた。されど幕府兵の大不平、大不滿はその絕頂に達し、遂に砲煙の妖氣をはらんで、明治元年一月三日、

總兵一萬五千鳥羽伏見の兩道より京師に攻め寄せて來た。玆に於て南洲は、薩、長、藝、大村、平戸、佐土原の兵五千を督し、連戰苦鬪して之を擊破した。斯戰に將軍慶喜は賊名を負ひて海路江戸に奔り、關西、四國の地は悉く朝廷の鎭撫使を迎へたのであつた。依て一月二十七日には大本營を大阪に移され、玆に東征の軍を起される事に決し、南洲は、征討總督有栖川宮殿下を奉戴して總參謀と爲り、總兵五萬の精兵を率ゐて之を追擊する事になつた。

二四　江戸城の開城と南洲

德川慶喜の大政奉還と、伏見島羽大敗の報が江戸に達すると、形勢の大異變に旗本八萬騎は勿論、江戸全市を擧げて驚愕した。今や幕府の執る可き手段は一つしかなかつた。朝命に恭順するか、朝敵となつて官軍と雌雄を決するか、その一つであつた。一月二十三日幕府は緊急會議を開き、將軍慶喜は、陸軍總裁勝安房の上言を容れ、微行して上野寛永寺に屛居して恭順の誠意を表し、官軍に和を請ふ事に確定した。この時官軍は東海道を平定して、三月三日駿府に入り玆に大本營を置いた。勝安房は直に南洲に會見し、一の嘆願書を提出して南洲の盡力を乞ふた。南洲は一諸之を容れ、江戸總攻擊中止の命令を發して、直に京都に向ひ、諸朝臣と重要會議を開いた。廣澤、木戸、岩倉の諸士は、德川慶喜を死罪に處する事を强固に主張したが、南洲は之を說破して曰く

「王者の政は須く、仁であるべし。德川慶喜は明かに恭順の意を表し居る。その頭に刄を當るが如きは王者の政に非ず」

と、之を斥け、重要の議題を確定して二十九日駿府に引き上げ、四月四日勅使と共に江戸城に入り、左の勅裁を田安中納言に交附した。

一、慶喜死一等を宥し、水戸へ退去謹愼の事。

二、江戸城明け渡しの事。

三、軍艦軍器引き渡しの事。

四、家臣共城外に退き謹愼の事。

斯くして江戸城は和平の間に朝軍の手に歸し、十五代將軍慶喜は水戸に退隱する事になつだ。

二五　南洲故山に歸る

天下の大勢は既に定まつた。維新の鴻業を遂げた南洲は、茲に高蹈勇退、職を辭して鹿兒島に歸り、武村の麓に閑居したが、東北諸藩の賊勢猖獗を極むるに及び、又、出でゝ之を平定し、直に歸國した。斯間に聖上陛下江戸に行幸あらせられ、東京と改名された。やがて函館五稜廓の亂報道さるゝや、再び、南洲は兵を率ひて東上したが、征討軍の到るを待たずして平定したので、早々鄉里に歸り、一介の農民となりて、悠々自適、只風月と娛しんで日を送つた。乾坤一擲尊王の大義を唱へて起ち、一朝功なれば、飄然として故山に起臥する、その心事の高潔なる事實に欽仰敬服の至りである。

二六　南洲更に朝に入る

されど時勢は、尙、南洲の故山にあるを許さず、遂に廟堂野臣の懇請默しがたく、明治四年二月上京して參議に任ぜられた。斯くして南洲は廢藩置縣、近衛師團の創設、警察制度の確立、宮中改革等着々其實蹟を擧げ、正三位勳一等陸軍大將兼參議近衛都督の榮位榮職を荷ひ、朝野の重望を一身に負ふてゐたが、茲に計らずも一つの難事件が突發した。そ

れはかの有名な征韓問題である。

二七　征韓問題

明治新政府は、王政復古のなりし旨を韓國に通告し、爾來屢々修交を申入れたが、韓國は、我が使節を峻拒して我國に侮蔑を與へ、明治六年には酷烈なる排日令を布き、同時に在韓日本人の引上を要求して來た。南洲は玆に韓國問題解決の急務を主張し、自ら使節となつてその任務に當らん事を運動した。斯くして漸く廟議の入るゝ處となり、三條實美卿は明治陛下に拜謁を遂げて其御內裁を得た。然るに岩倉大使一行の歐米より歸朝するに及び、廟議旣に一決せる該問題に猛烈なる反對論を唱へ、朝議を覆へすべく大飛躍を試みた。即ち、征韓を非とする者に岩倉具視卿を始め、大久保利通、木戸孝允、黑田淸隆、伊藤博文、大木喬任等の諸士、征韓を主唱する者に南洲を始め、後藤象次郎、福島種臣、江藤新平、板垣退助の各參議、兩々相對抗して互に下らず、論戰數回に渡るも、閣議は遂に決しなかつた。斯くて最後の內閣會議が九月十七日に開會されたが、斯日非征韓派は全部缺席して姿を見せず、剩へ三條大政大臣俄然發病するや、反對黨の岩倉具視卿が之に代つて一切を署理する事になつた。事玆に到れば、南洲も終に、遣韓使節は斷念せねばならなかつた。しかして即日辭表を提出して二十八日、鄕里に向つた。同時に板垣等四參議職を辭し、桐野利秋、篠原國幹の二少將をはじめ、別府晉介、邊見十郎太、池上貞固、淵邊高照以下少壯近衛士官、續々と職を辭して歸國してしまつた。

二八　私學校創立

故山に歸臥せる南洲は、部下の激奮を軟げ、青年子弟を適當に指導養成する目的で、七年二月城山麓に私學校を創設し、左の同盟趣旨二ヶ條、即ち

一、道同じく、義協ふを以て、暗に集合す。故に益々この理を研究し道義に於ては一身を顧みず、必ず踐み行ふべき事

二、王を尊び民を憐むは學問の本旨なり、されば斯天理を究め、人民の義に臨みては一向難に當り、一統の義を相立つべき事

と、書ぎ綴りて之を揭かげ、村田新八、桐野利秋、篠原國幹を教官となし、賞典錄を以て之が基金とし、又、吉野村には別に開墾社を立て、生徒をして農事に勉勵せしめた。斯く人材養成に盡力してゐる內に、江藤新平は佐賀に亂を起し、熊木には神風連か亂れ、次で、長州の前原一誠も萩に兵を擧げた。然し南洲は、あくまでも世の變遷を冷視し、私學校生徒をして附和雷同の擧なき樣、調戒した。

二九　西南の役

然るに、時の政府は南洲の眞意を疑ひ、中原尙雄以下、多數の偵吏を鹿兒島に送つて、私學校の動靜を探らせたが私學校生徒は早くも之を知り、直ちに之を擄して警察に送り、署長中島健彥は中原を結問し「大久保內務卿及び川路大警視の密命を含んで、西鄉隆盛を暗殺せん爲めに來れり」との口述書をとつた。時も時、政府は、密に磯海軍造船所貯藏の彈藥を大阪に移送せんとした。刺客一件で大に激奮してゐた私學校生徒は之を知るや否や、遂に數百名一時に造船所を襲擊して彈藥全部を掠奪した。斯時南洲は例の如く大隅山の狩りくらに在つたが、急使によつて異變を知り、天を仰いで悲嘆する事少時

「あゝ吾事遂に終れり」

と、匆々鹿兒島に歸つたが、私學校黨は既に武裝して南洲の歸着を待つてゐた。南洲はもはや勢の回すべからざるを知り、慨然として子弟の爲めに一身を捧げ、明治十年二月十四日、壹萬五千の薩南健兒を率ゐて鹿兒島を進發し、隊伍肅々熊本に向つた。即ち第一大隊長篠原國幹、第二大隊長村田新八、第三大隊長永山盛弘、第四大隊長、桐野利秋、第五大隊長、池上貞固、以上の外に別府晉助隊、貴島清隊等、みな之れ豪勇無比の鬪將のみであつた。南洲は一切の軍務を桐野に一任して敢て關はらず、その身は子弟の爲すがまゝに委してゐた。官軍は山縣有朋、川村純義の兩中將が參軍を拜命し、野津、鳥尾、黑田、三浦、山田、三好等の諸將が數萬の兵を率ゐて薩軍に當つた。斯くして官薩兩軍は、熊本の山野に開戰の火蓋を切つたが、薩軍の精悍當る處敵なく、一擧熊本の堅城

を屠らんばかりの勢を示して、官軍の心膽を寒からしめたが、薩軍軍需品輸送の任務に當つた當時の鹿兒島縣令大山綱良が、官軍の手に捕縛さるゝに及びて、次第に敗退の兆を呈して來た。先づ三月二十日には田原坂の險要が敗れ、篠原國幹は敵彈に中つて斃れた。四月十三日、永山盛弘は、三船に敗戰して自刄した。四月卅日に人吉の本營が敗れた。五月二十九日には野村忍介の一隊が豐後路に敗れ、池上貞固の別働隊も延岡に敗れた。七月二十四日都城が陷ち、三十一日には宮崎が陷り、八月二日には高鍋が落ちた。八月十五日には、長尾山に大激戰を開いた、斯時薩軍の兵數は既に三千、官軍は五萬有餘、遂に薩軍は衆寡敵せず重圍の中に陷つた。然し八月十七日には、かの有名な薩軍の突圍戰が見事に成功した。挫折しても尙撓まざう精悍な薩軍は、其日の拂曉、可愛嶽の天險を衝き、三好、野津兩旅團の兵を敗つて三田井に脫出したのである。

而も斯時薩軍の兵數は五百に過ぎなかつた。げに、鹿兒島を進發してより既に半歳、斯間南洲は、子弟に擁せられて肥後、豊後、日向、大隅と、祭禮の神輿の如く引き廻され、九月一日鹿兒島に還り、城山に據つた。九月六日、官軍は全く城山を包圍した。南洲は、悠々自適、洞中に碁を圍み、又、詩を吟じなどして、毫も死地にある者の如くでなかつたが、意既に決するところあり、二十三日、洞前に諸將士を會して袂別の宴を張り、翌二十四日朝、洞窟を出でゝ岩崎谷を下つた。從ふ者、桐野利秋以下四十四人、肅々として聲なく岩崎口の堡壘(今終焉碑の建つ處)に到つたが、敵彈一飛、遂に南洲の腹部を貫通した。南洲傷重くした再び起つ能はす、徐に跪坐して東天に向ひ、遙に皇城を拜しつゝ、別府晉介の介錯のもとに刄に伏した。村田新八、邊見十郎太、別府晉介、池上貞固の諸將悉く之に倣ひて自刄し、桐野は敵彈に中つて斃れた、時に明治十年九月二十四日午前九時、南洲、年五十一才であつた。

二、逸話事蹟其他

□輕卒に皇室を語らぬ南洲

南洲は、平素客と雜談中は、必ず輕卒に皇室を語る事をしなかつた。然し適々談話が皇室に及ぶ事があれば、儼然として必ず襟を正し、端坐して靜かに口を開いたといふ。又、皇室より御下賜（南洲翁を以つて嚆矢とす）の御眞影は自家の氏神に祭り、毎日朝夕の禮拜をおこたる様な事がなかつたといふ。

□身邊は自ら始末して

南洲の家に在る時は、常に自ら身邊を始末し、寢具の取片付け、戸障子の開閉の如き、凡て自身の事は自ら始末し、決して之を他人に言ひ付けなかつた。然し、他人が强て爲さむといふのを辭退した事もなかつた。又、人が爲しつつある事を制して自身が代るといつた様な事もなかつたといふ。

□父母の命日を忘れず

南洲が故山に在つて、適々、父母の命日に會する事があれば、いかに多忙な日と雖も、必ず木綿の紋付羽織を着し、粗末な小倉の袴をはき、手づから手桶と草花を携へて墓參をしたといふ。

□從僕を見舞ひて

安政元年の春、南洲が藩主齊彬に扈從して初めて江戸に上らんとした當時、南洲の下僕權兵衞は、重病の床に就いて居たが、愈々出發が明日にさし迫つたといふ多忙の日、南洲は諸事を都合して權兵衞の病床を見舞ひ、果ては權兵衞が感泣して辭退するのも聞き入れず

「ないも、心配しぐれ入らんが」（何も心配する必要はない）

と、徹宵何くれと世話をやき、翌早朝、不眠に疲れた巨体をひつさげて鹿兒島を出發したといふ。

□南洲嘔吐して席を汚す

安政元年江戸に上つた南洲は、樺山三園、津田山三郎と共に、水戸の藤田東湖を訪ひ、深く其人と爲りに服し、其後屢々其門を訪ねて意氣相投合、肝膽相照すに至つた。或日東湖は南洲を呼んで一太白を浮べ、大に酒を勸めた。南洲は忽ちにして酩酊度を失し、果ては座席に嘔吐を放瀉し、平然之を顧みずして東湖と談笑した。東湖は密に南洲の豪放大器に驚き且つ愛し、後人に向ひて

「將來我國運を負擔し得るものは獨り斯快男兒あるのみじや」

と、激賞したといふ。

□斷腸の思ひを忍んで

南洲、或日、梅田雲濱を京都の寓居に訪ふた。時に雲濱赤貧洗ふが如くであつたが、其妻女、髮に挿せる銀かんざしを取つて入質し、酒肴を調へて南洲を饗した。南洲はただちに夫妻の衷情を知つたが、何事

をも知らざる風に裝ひて、斷腸の思ひを忍び乍ら快よく飮み、夜を徹して語り明したといふ。後、南洲雲濱を許して謂ふ。

「雲濱、今に生きながらへてゐたならば、我々は執鞭の徒に過ぎないであらう」

と。

□我は萬兵の將たらんのみ

南洲、或日、賴三樹三郎を訪ふた。三樹三郎、人と爲り、磊落にして酒好きであつたので、大に酒肴を饗し、痛飮淋漓快を盡した。やがて興に乘じて三樹三郎、南洲の志を問へば、南洲聲に應じて

「我は萬兵に將たらんのみ」

と、答へた。三樹三郎莞爾として頷き、南洲のその家を辭し去らんとする時、門に之を送つて

「好漢、自愛せよ」

と、その肩を叩いて前途を勵ましたといふ。

□南洲は巨鐘の如し

土佐の奇傑阪本龍馬は、勝海舟の紹介で、はじめて南洲と會見したが後、人に語りて曰く

「南洲は巨鐘の如し、微に叩けば微に鳴り、大きく叩けば大きく鳴る。その度量、とても計り知る事は出來ぬ」

と、爾後、南洲と龍馬は互に往來し、其交り膠漆の如くであつたといふ。

□君臣水魚の交り

南洲は藩主齊彬の寵遇を得、齊彬も又、南洲を信じ、所謂君臣水魚の間であつた。南洲が齊彬と時事を談ずる時は、直ちに意氣投じ、情熱して覺へず接近して膝は相磨するに至り、齊彬は君たるを忘れ、南洲は臣たるを忘るゝ事屢々であつたといふ。嘗て、齊彬の左右の者、人に語つて謂ふ。

「齊彬公が、隆盛を召されて御内談の時は、煙管もて灰吹を叩き給ふの音平常と異りて聞こへたり」

と。

□齊彬に一喝された南洲

南洲がまだ、庭方役の下職を奉じてゐた頃は、齊彬は佐幕派の近臣を憚り、密に庭園の一隅で南洲と會合し、時事を談じた。或日、南洲は齊彬の命を受けて、人足共に庭園の修理を爲さしめた。例の如く其日も庭園で齊彬と會合するの約であつたが、定刻に齊彬の姿が見へないので、その居間に近づき、庭園修理の爲りし旨を告げた。恰もその時齊彬は、佐幕派の近臣と談話中であつたので、大聲、

「斯の馬鹿者が」

と、一喝した。斯日、齊彬は近臣の接見に忙がしく、庭園に出る閑がなかつたのであつた。南洲は之を知らずにこの失策を演じたのであつたが然し齊彬の一喝がもとより嗔怒の結果でなかつた事は勿論である。

□薩藩の寵兒

薩藩主齊彬は、嘗て、越前侯松平春嶽と會見せる時、南洲を評し

「我家、家臣多しと雖も、その用にたつ者いたつて寡し。されど、隆盛一人は薩摩の貴重たる大寶である。然し彼は、獨立獨行の氣象に富む故、我ならでは之を用ひ得る者あるまじ」

と、謂つたといふ。

□白面の青年と見て侮り

南洲は、藤田東湖の邸で橋本左内の顔を初めて知つた。南洲の見る處左内の狀貌婦人の如くであるので

「こやつ、もの丶用にはたつまい」

と、頗る輕視してゐた。處が左内は、翌日、南洲を芝の藩邸に訪ひ、

「仄かに聞くに、足下は、國家の爲に力を盡してゐらる丶由、實に敬服の至り、爾今、余も足下の教導を得て驥尾に附し、俱に俱に國家の爲に盡したい」

と、云つた。しかし南洲は、冷然、壯士を指して

「御はんは人まちがいしちゃいかん。おいどんな、國家の事など辨へる樣な人間じや無か。毎日、こやつ等と、角力どん取つて遊んどるばつかいじや」

と、頭から相手にしなかつた。左内は重ねて

「余は、足下の大志あるを知る者である。願くば胸襟を被いて談じて貰ひたい」

と、是より徐々と天下の形勢を論じたが、其明識なる事、歴々として之を掌上に指す樣であつたので、南洲、始めて其尋常人に非ざるを知り、深く前非を悔ひたのであつた。そこで翌日は、早朝沐浴して衣を整へ、

左内を越前藩邸に訪ひて先づ昨日の無禮を謝し、且つ共に提携して力を國事に盡さん事を誓つたといふ。後年南洲は人に語つて

「余は先年、白面の青年と侮りて、あやうく一同志を失はんとせり、外見のみを見て人を評するは、愼しむべき事なり」

と、云つた。又

「余は先輩に於ては藤田東湖を第一に推し、同輩に於ては橋本左内を第一に推す」

と、云つたといふ。

□扶持米を割きて貧民へ

南洲は月照と入水後、大島に流されたが、もとより一般の罪人とは異つてゐたので、六石の扶持米を藩から與へられてあつた。けれども南洲は、常に貧民の爲めに、自分の扶持米を施與したので、果ては自分の衣食にも窮し、郷里の家より密に二石の送與を受け、其不足を補つてゐた。後、斯事が藩廳に知れ、更に六石を追増して送られる事になつたといふ。

□井伊大老の要擊に雀躍す

南洲の大島に在りし頃、一日、內地よりの書信に接したが、之を被き見るや否や、一刀を引き抜きて庭園に飛出で、大聲を擧げて庭樹を斫る事數回、暫くして足を洗ひ、欣然として室に入り、妾に酒肴を調ふべきを命じた。妾、其擧動を怪みて其故を問へば

「汝の知る事ではない。早く佐民を呼べ」

と、暫くして佐民が姿を現すと、南洲は聲を勵まして

「今、井伊直弼要撃の報を得たり。痛快、實に斯事なり。今日は國家の爲によろしく一太白を擧ぐべし」

と、喜色滿面、痛飲淋漓、快談時の移るを知らなかつたといふ。

□何といふ懶け者じやな

文久二年、南洲は、冤罪を受けて德之島に流された。島に一老婆があり、南洲を諭して謂ふには

「遠島人は大概一度で改心するものじやが、御前ばかりは、まあ何といふ懶け者じや。まだまだ二度も遠島されたと、聞ひた事がない。今よりは篤と改心して、一日も早く赦免せらるゝ様にするのじやぞ」

と、南洲之を聞いて顏を赧め、恥じ入りて、老婆の厚意を感謝したといふ。

□余は君命に背くを好まず

南洲の德之島より更に沖の永良部島に流されんとする時、南洲は藩命を遵奉して、帶刀を脱し、船牢に入りて井の川村を出帆した。出發の際德之島在番役、密に南洲に向つて云ふには

「海上にては牢の外にありて休息なされ、着島の時に牢內に御這入りなされよ」

と、再三勸めたが、南洲は之に應ぜず

「余は今日より、一ヶの流罪人である。苟も君命に背くが如き事は仕たくない」

と答へ、自ら進みて舟牢に入り沖の永良部に向つたといふ。

□獄中の南洲

南洲の沖の永良部の獄舍にあるや、水を求めず、また、湯を乞はず、午餐及び晩食は朝食の殘飯を食し、副食は蔬菜のみを用ひ、又喫煙を斷ち、常に端座して沈思默想に耽つてゐた。或日、獄吏土持政照、南洲に拍子木を渡して、用事ある時之を使用する樣云ひ置いた。しかし南洲は只其厚意を謝したるのみにて、嘗て一度も拍子木を打たなかつたといふ。

また、盛夏嚴冬の候と雖も、苦痛の色を表はさず、神色自若として平常と異ることがなかつた。土持政照等南洲の苦節に感じ、不遇を悲みて、以後、滋味を供し、寢具を新にし、沐浴を進め、小使を附して使役せしむる等極めて懇切に待遇した。又牢外の運動を勸めたけれども、南洲、之には應ぜず、浴、終れば直に牢内に入り、また出る事をしなかつた。

□おいよごれ飮まんか

南洲の沖永良部島に流さるゝや、吉井友實（後の伯爵）は同志と共に南洲の赦免の事に盡力し、藩主久光に請ひて遂に其許しを得、自ら藩の使者となりて沖永良部島に渡り、其命を南洲に傳へた。其日、土持政照等南洲の爲に盛大な送別の宴を開き、吉井友實以下藩の使者、及び、南洲に教へを受けし者共多數相會したが、宴、酣な頃南洲は、友實に盃を差し

「おいよごれ呑まんか」

と、やつた。友實之を聞き、色を作して南洲に向ひ

「余は苟も君命を帶びて來れる者である。然るに、何故なれば斯の如く嘲罵するや」

と、南洲笑つて云ふには

「足下は子供の時分、いつも汚れ居つたではないか」

と、答へ、政照を顧みて

「土持どん。この吉井は、子供の時分、よごれちゆう、綽名がごあしたよ」

と、呵々大笑すれば、友實始め一座一時に笑聲を擧げ、是より和氣藹々の佳境に入りたりといふ。

□增築が氣に入らぬ

南洲が沖永良部島より、赦されて鹿兒島に歸ると、留守中に其邸宅が增築してあつた。南洲は門前に立ちどまつて不快の色を顏に漂はしてゐた。從者の一人怪みて其故を問へば

「住宅の如きは、いかに粗末なりとも、決して厭ふべからずと、平生から戒め置きたるに、今や斯の如し。家內の者にして余の命を用ひずば、あゝ、天下いかで余輩の言を聽くものぞ」

と、概然として云つた。是を聞ひた一同、肅然頭を垂れて一語を發する者とてなかつたといふ。

□仕方なき人物

維新前、南洲は宇和島に到りて、藩主伊達宗城を訪ふたが、宗城、酒宴を張り、美妓を出して南洲を饗應した。宴酣なる時、宗城戲れて云ふには

「足下は京都に美形がありますか」

と、然し南洲は、之に答へる事をしなかつたので、宗城重ねて其名を問

へば、南洲は

「其名を聞ひて何にしますか。それよりも一歩を進めて國家の大事を御下問ありたい」と。

宗城、之をきゝ

「足下の言は何といふ殺風景なものじや。足下は實に仕方なき人物じやな」

と。然し宗城の顏には、明かに慚愧の色が漂つてゐた。

□慈母の如くに南洲を慕ふ

伏見戰事前、南洲は每日參內して、薄暮藩邸に歸る事があつた。薩藩の壯士等は不斷幕吏に狙はれてゐる南洲の身を案じて其出入を氣遣ひ、歸りの遲き時は、恰も慈母を待てる小兒の如く、門に倚りて之を眺め、其姿を認めて後、はじめて箸をとつたといふ。

□長袖者流役に立たぬ

明治元年正月三日、鳥羽、伏見の戰が起つた時、南洲は宮中に參內してゐたが、滿廷の公卿、諸侯、砲聲の殷々として伏見方面に轟くを聞き顏色土の如く、南洲の側に集りて、袖にすがらんばかりの有樣であつた後、南洲、當時の事を人に語りて曰く

「長袖者流の、難に臨みて役立たぬ事は斯通りじや」

と笑つてゐたといふ。

□汝等が死んだ頃に

伏見、鳥羽の戰に、官軍の或部隊が小勢であつたので、急を相國寺中

の陣營に報じ、南洲に援兵を乞ふた。南洲、手を擧げて

「殘りの兵數はどの位ひじや」

と、問ふた。使者答へていふには

「一小隊足らずであります」

と、南洲笑つて使者に向ひ

「そうか。では汝歸りてみなに傳へよ。汝等が死戰し、斃れた頃には御望みの援兵が着くであらうから、一同安心して死ぬがよいと」

使者、之を聞き、顏を赧め、蒼皇として立去つたといふ。

□敗者を追ふは武士に非ず

戊辰の役、北越平定後、米澤降り、ついで庄內も亦降つた、南洲は村田新八を隨へて庄內に入り、兵器隊長山下親房に命じて、薩軍を徹退せしめんとしたが、親房大に之を危ぶみ

「庄內軍が愈々鎭靜するを待て、徐々に徹退せしめてはいかゞでせう」

と、語つた。南洲、之を答へて

「武士たる者が、一旦兜を脫ひで軍門に降りたる以上は、之を追究するの要はない。若し再び亂を起さばまた、之を征したらよいのじや』

と。親房は命の通りに速時徹兵した。ついで長州の前原一誠は陣中に之を傳へ聞き

「余はもとより西鄕の人と爲りに服してゐたが、斯一事を以て益々彼の大度量、大信義に驚嘆した」

と、爾來、庄內の藩士、南洲の德に服し、十年戰役の際、薩軍に投ぜんと、暗中飛躍をしたのも之が爲であつたといふ。

□次弟の死に泣き明す

南洲の次弟吉次郎は、戊辰の役に越後路で戰死した。南洲は痛嘆の餘り一室に打伏し、涕涙滂沱、悶々として一夜を明したといふ。當時、知人に贈れる書中に謂ふ。

「愚弟吉次郎、越後路に於て戰死いたし、殘念斯事に御座候、拙者第一先に戰死致すべき處、弟を先立たせ涕泣いたすのみに御座候。御悲察給はるべく候」

と。

□江戸城の晝寢

明治元年、江戸城引渡しの際、南洲は、勅使橋本實梁、柳原前光に隨行して、西丸より殿中に入つた。勅使、隨行の士、皆恟々として不安の色を漂はし、田安中納言と面接してゐたが、獨り南洲は、いつの間にか姿を隱して、勅使退出の時刻となつても遂に姿を見せなかつた。そこで大久保一翁等、南洲の身を案じ、殿中隅なく捜して見ると、何ぞ圖らん南洲は、鼾聲轟々雷の如く一室に眠つてゐた。一翁等は驚き且つ呆れて勅使退出を大聲に告ぐれば、南洲は大欠びして身を起し

「城中の壯麗に恍惚としてゐる内、遂、ふら／＼眠つてしまつた」

と、哄笑し、悠々として退出したといふ。

□乳臭兒の後藤象次郎

明治元年、江戸城明渡しを濟した南洲は、京都に還り、後藤象次郎を共寓に訪ふた。象次郎南洲に向つて

「足下、江戸にて何か痛快の事が御座つたか」
と、問ふた。處が南洲は言下に
「江戸にて勝安房と會見の際、勝の云ふには、土佐藩の子僧、後藤象次郎なるもの京都に於て傍若無人の權威を奮ふ由、かゝる乳臭兒の横行を許す薩軍年人の價値もまた、知れたものでは御座らぬかと。余は斯時程赤面した事は嘗て一度も御座らぬ」
と、言ひ終りて只哄笑するのみであつた。これには流石の象次郎も、南洲を默視するのみで二の句を繼ぐ事が出來なかつたといふ。

□賞典を奉還して

明治二年朝廷は、南洲が維新第一の功臣といふので、賞典二千石を下賜された。然し南洲は
「維新の大業は、一人の力に成つたのではない。隨つて其賞典も、一人で多くを私すべきものではない。加ふるに維新創業日尚淺き際なれば、之を奉還して其萬分の一を補はねばならぬ」
と、固く辭して受けなかつたが、政府之を許さず、再三懇願して漸く其幾分を受領したといふ。

□位は役に立ち申さぬ

明治三年、正三位に叙せられた南洲は
「我藩主忠義公は從三位にして、其藩士たる余の、正三位に叙せらるゝは人情の忍びざるところ、またかゝる位階は、余等如き田舍者には何の役にも立ち申さぬ」
と、固辭したが、遂に聽かれなかつたといふ。

□家賃參圓

南洲が陸軍大將の顯職にあつた當時の生活は、一ヶ月の家賃僅に參圓、生活費十五圓を出でぬといふ質素振りであつた。衣は常に薩摩飛白の短衣、それに白木綿の兵兒帶を結んでゐた。また、大道を濶歩するにも、粗末な木履、或は、藁草履の尻切れをつけて悠々たるものであつたといふ。

□南洲の居宅

南洲が、東京蠣殼町の邸に居た頃、或人一日、其家を訪ふた。先づ玄關を見れば數多の下駄が亂暴に脫ぎ捨てゝある。座に上れば、十四五疊ばかりの座敷に、兵士又は書生の如き人々と、南洲は麵麥を食してゐたが、その麵麥は、手桶に入れて冷したるまゝであつた。また、南洲のかたはらには、粗末な煙草盆と、うしろの壁に一筋の手綱が掛けてあるばかり、實に簡素も簡素、然し之が當時近衞都督の顯職にあつた南洲の居室であつたといふ。

□懷中より取出した參拾金

南洲が近衞都督の顯職にあつた頃、或日、士人某が南洲を訪ねて就職を依賴した。南洲は士人に向つて尋ねた。

「俸給幾許を望むのか」

と、士人、辭を低くして

「ハイ三十金位ならば結構であります」

と、答へた。そこで南洲は、直ちに懷中より三十金を取出して士人に與

へた。其人痛く愧じて辭し去つたといふ。

□余が愛妾

南洲が東京蠣殻町にゐた頃、二頭の獵犬を購入した。或日、數人の訪客があつたが、南洲、客に戯れて

「余は最近、二人の愛妾を容れた」

と、いつた。訪客、不審の色を作して

「然らば早速面謁の榮を給りたいもので」

と、申込んだ。そこで南洲は座を立ち、大聲に名を呼べば、二疋の獵犬忽ち走り來つて、南洲に戯れかゝつた。南洲、その頭を撫して呵々大笑し

「余の愛妾は即ち之じや」

と、いつた。訪客、之をきゝ顏を赧め、蒼皇として辭し去つたといふ。

□土持政照を揶揄す

南洲、或日、桐野利秋、村田新八、土持政照と共に、東京の郊外に狩獵に出かけたが、途中俄の大雨に逢ひ、一同ずぶ濡れとなつて南洲邸に引き返した。各々濡衣を更ゆる時に、南洲は政照に戯れて云つた。

「御身の雨に濡れたのは今が始めてだらう」

と。政照、不審の面持ちにて尋ねた。

「それは一体、何の事で御座るか」

と。南洲、彼を揶揄して

「御身は沖永良部の與人ではないか。與人役の出入は、雨の降らぬのでさへ、威儀堂々數多の從者に長柄の傘を翳さするから、恐らく雨に

逢ひたるは、今日が始めてだらう」

と、村田新八は顧みて破顔一笑すれば、政照頭を掻いて苦笑するのみであつたといふ。

□人を叱るの値なし

南洲が、近衛都督の顯職に在つた頃である。或日、弟從道を青山の邸に訪ふた。當時、從道は獨捿の頃であつたので、一人の炊婦を傭入れてゐたが、その日適々、從道は不在であつたので、南洲は座に上つて歸りを待つてゐた。恰も正午、家婢が味噌汁を烹て膳を供へた。南洲は快く之を食し終つて書見してゐたが、やがて從道歸宅して膳に向ひ、件の味噌汁に箸をつけたが、鹽味薄くして到底口にする事が出來ない。從道思ふに、家婢、汁の加減を試むる事を忘たのであらふと、痛く之を叱り更に南洲の前に連れ來つて之を謝した。南洲、靜かに口を開ひて從道に向ひ、

「汁の鹽加減位ひになぜ人を叱るのじや」

と、只一語、再び書籍に目を移して、少しも意に介する處がなかつた。從道、甞て之を人に語り、其遠く南洲に及ばない事を嘆じたといふ。

□遠島の事を語るは苦痛じや

明治六年頃、南洲は、病氣靜養の目的で、弟從道の邸に寄寓してゐた。或日、土持政照、南洲の病床を見舞つたが、南洲、政照に向ひ

「畏多くも今回、陛下より洋醫を遣すとの優渥なる恩命に接し、感泣してゐる次第であるが、それに就て少し氣がゝりでたまらぬ事がある」

と、云つた。政照、怪みて其故を問へば、南洲、頭を撫して
「洋醫は病氣診察の際に、既往の經歴を詳細に質問するといふ事じや。不幸な事に余は、遠島罪科の經歴がある。斯かる事を醫者に語るは、どうも慚愧に堪えぬ次第でのう」
と、語り終りて失笑してゐたといふ。

□わしは大庭園を持つとる

南洲が、東京小網町の邸に居た頃、或日、知人某が南洲を訪ね、何かの話の序に
「御見受する處、どうも御邸が粗末の樣ですが、ちと、庭園の御手入れでもなされてはどんなものでせう」
と、餘計な口を叩いた。處が南洲
「庭園か。庭園なら門外に廣々とした、ふとかとを持つとるのじや」
と、知人を見て笑つてゐたといふ。

□何しに行くのじや

明治六年、露國皇族が日本に來遊された。時の太政大臣三條實美、以下諸大官其旅館に伺候し、待遇最も鄭重を極めたが、南洲は悠々、幾日經つても旅館に伺候仕樣としなかつた。そこで皇族は、近侍の者を顧み
「西郷はどうして來ないのじや。彼はよほどの變り者と見へるな」
と、云はれた。斯話を傳へ聞ひた、外務卿副島種臣は、早速南洲を訪ね
「どうか一度、旅館に伺候して戴きたい」

と、云ふのであつたが、南洲はいとも冷ややかに

「用もないのに何しに行くのじや。なんと無益な事じやないか」

と、少しも意に介する處がなかつたといふ。

□東京引上の當時

明治六年十月、征韓問題が中絶すると、南洲は速時辭表を提出して政府を去つた。私邸は一切の訪客を避け、密に從僕熊吉を隨へ、編笠を被り、獵銃を携へ、小網町の寓居を出でて、小梅なる越後屋の別莊に隱れ談笑平常と異るところなく、詩を賦し、或は池に釣を下ろしなどして日を送る事三日、再び寓居に立歸り、密に品川より船に乘つて鹿兒島に向つた。途中大阪に上陸すると、稅所篤、直ちに南洲を旅館に訪れて、廟議の模樣を尋ねたが、南洲は

「大久保が政府に留つてゐる。政治の事なら一切、彼に尋ねるがよい」

と、遂に一言も廟議の模樣を口にしなかつたといふ。

□公義に厚き人

明治七年、征台の役が起つた。西鄕從道、征台軍の都督と爲り、台灣に赴かんとするに當つて、長崎より書面を以つて兵員の募集を南洲に依頼した。南洲は從道とは兄弟の間なるにも拘はらず、征韓論破裂以來至つて疎濶であつたが、公義に厚き南洲は、直ちに之を快諾し、晝夜自ら四方に奔走して八百餘人の兵を募り、之を長崎に向はしめた。斯兵士が鹿兒島を出發せんとする時、南洲は兵士を埠頭に送つて、慇懃懇切に奬勵を加へたので、兵士は涙をふるつて南洲の至情を謝し、力を王事に盡

さむ事を誓つたといふ事である。

□私學校を創立して

明治七年二三月の頃、鹿兒島に私學校が創立された。南洲は校舍に臨み自ら筆を把て、同盟旨趣二ヶ條、即ち

一、道同じく義相協ふを以て暗に集合せり云々

二、王を尊び民を憐むは學問の本旨なり云々

と、書して、桐野利秋、篠原國幹等に示し、以後、之を以つて學校の主義方針と決つしたが、其日利秋、說をなして

「吾人が學校を建て、同志を募り相同盟せし所以は、志を同ふし義相結び、有事の際は一致協力して大に爲す處あらんとする爲めである。故に必ずしも毎日出校する要はない」

と、云つた。然し國幹は

「學校の創立は、一は同盟協力、一は學を修め藝を研き、青年の人材を養成する爲である。故に毎日出校して文武の道を勵むべきなり」

と、云つた。南洲、兩者の說を聽き、國幹の論を良しとし、生徒をして毎日出校せしむる事とし、毎月拾五日を以て會議日と定めた。以後、國幹は毎日出校して生徒監督の任に當つたが、利秋は出校甚だ稀であつた。又南洲は、巡獵幾日に及ぶも、十四日には風雨を厭はず必ず鹿兒島に歸り、拾五日の會議に出席した。故に校徒みな感奮興起して文武の研鑽に力めたといふ。

□受領せぬ休職給

明治六年、職を辭した南洲は、鹿兒島に歸りて武村の家に起臥し、勤

儉質素の四字を以て家法と定め、賞典錄は悉く之を私學校に投じ、陸軍大將の休職給は縣廳に保管して、一厘たりとも受領仕樣としなかつた。爲に家計は甚だ困難であつたが、毫も意に介せず、粗衣粗食、粥をすすりて其日を送つてゐたといふ。

□汝の顏人糞を厭ふの資格なし

南洲の私學校時代鹿兒島に在る時は、自ら糞桶を馬に負せ、風呂敷包を背につけて、吉野村の開墾場に赴くを例としたので、私學校壯年の徒

「大先生すら斯通だ」

と、相競ふて人糞を汲み、開墾力耕に努めたが、後、校徒中に懶る者があつた。南洲、之を聞き、一日、開墾監督永山休二（甞て近衛陸軍大尉）を招き、彼に向つて云ふには

「汝の顏付きを眺むるに、少しも人糞を厭ふ資格を具へず。故に若し汝が人糞を厭ふの所爲あらば、毫も猶豫せず汝を開墾場の松樹に縛し付け、頭上より糞汁の饗應を爲し吳れむ」

と。休二、之を聞き、平身恐縮して引下り、之を校徒に傳へたので、校徒再び事業に奮勵し、以後、怠る者が一人もなかつたといふ。

□馬を追ひて歸る

南洲は、私學校の生徒と共に吉野村の開墾に從事する傍ら、西別府の地にも桑、茶、その他の蔬菜類を栽培してゐた。或日、南洲は、收り上げの大根を馬に積んで歸る途中その馬俄に狂奔して、大根を悉く地上に墜してしまつたが、南洲は之を捨てゝ毫も顧みず、氣息奄々馬を追ふて

歸宅した。家人、不審の眉をひそめてその故を問ふたが、只、頭を撫でゝ大笑するのみであつたと。

編者 註（南洲は困惑な場合、必ず頭を撫でる癖があつた。）

□下駄の緒を結んでやる

南洲、一日、畑に糞桶を擔ひ行く途中、士人某途上にて下駄の鼻緒を切り、突然南洲を呼びとめて

「こらこら百姓、一寸下駄の緒を結んで吳れんか」

と、光榮な仕事を云ひつけた。然し、南洲は士人の命ずるまゝに唯々として之を結んだ。後、幾年、南洲は圖らずも件の士人に逢つたので、その時の光景を笑ひ乍ら語つた士人是を聞き、驚愕おく處を知らず、平身低頭して其無禮を謝したが、南洲は

「いや、わしは無益な事を云ひ出したものじや。どうか恕して吳れよ」

と、一笑に附してしまつたといふ。

□飯櫃の下に紙幣

南洲、一日、市外なる鰻料理の某樓に上り、蒲燒を喫して、歸るに臨み紙幣を密に飯櫃の下に置て立去つた。主人はもとより之を知らないので、直に後を追ふて代價を求めた。南洲答へて云ふには

「飯櫃の下に置いた」

と、只之れ丈。主人、歸りて飯櫃の下を見れば、拾圓の紙幣である。再び驚いて南洲を追ふたが及ばなかつた。數日を經て、主人は、其人の南洲であつた事を聞き、早速衣を改めて武村の私邸を訪ひ、前日の無禮を謝

して剰餘の金を返へさんとしたが。南洲は之をとどめて

「私學校の生徒のうちには、汝に負債ある者もあるであらう。其金でその不足の幾分なりでも補つて呉れ」

と、强て納めしめたといふ。

□南洲と私學校生徒

南洲、私學校生徒に訓ふるに、廉恥を重じ節義を尙ぶことを以てし、只管士氣を鼓舞したから、生徒みなその訓へに服し、士風大にあがり、苟も廉恥節義に反する行あるものは、同士互に面責して之を悔改せしめ其効なきものは之を徐名して嚴しい制裁を加へた。故に一鄕靡然として風を改め、明治七八年の間には只一人の破廉恥漢さへ出さなかつたといふ。又、店舗の如き、例へば草鞋等を賣る者は、只店頭に代價を記して品物を釣り、旅人の取るに任せて顧みず、旅人又、之を私する樣な事がなかつたといふ。

□弊衣の光

南洲の鹿兒島に於ける德望は非常なものであつて、私學校の徒はみな大先生と稱してゐた。嘗て福岡縣人奈良原某鹿兒島に來り、生徒の一人と城北の探海に出かけた。山間の谷川を行く事數丁、生徒突然驚いて路を橫に換へんとした。奈良原怪みて其故を問へば

「大先生來る」

と、答ふ。忽ちにして肥大の一田舍翁、身に襤褸を纏ひ、背に獵銃を負ひ、二三の獵犬をしたがへて來た。奈良原、その南洲なるを知り、路を讓りて敬禮すれば、南洲も又答禮して過ぎた。奈良原、後、人に語りて

謂ふには

「慈愛の情、冥々の裡に存し、威嚴の光弊衣の中より發す。あゝ麗城數萬の壯士、先生一呼吸のもとに生死する、實に偶然に非ず」

と、云つたといふ。

口芋連と腐芋連

土佐の林有造、七年の始め鹿兒島に遊び、南洲を訪ひて曰く

「鹿兒島は人材頗る多し。之を類別する方法如何」

と。南洲たゞちに筆を把りて、

「芋連」と題せる下に、隆盛、利秋、國幹等七八人の名を書し、又、

「腐芋連」と題せる下に、大久保利道、川路利良等數人の名を記し、有造に示して呵々大笑したと。

口汝等は余が訓へを忘れたるか

南洲、嘗て、東郷平八郎、柴山矢八、上村彦之丞等の俊才を、海軍兵學校に入らしめた。已にして南洲、辭職して故山に歸るや、彦之丞等南洲の眞意を確め、然る後、進退を決する處あらんと、密に校を脫して鹿兒島に歸り、南洲を訪ふた。南洲、彼等に向つて云ふには

「汝等は余が訓へを忘れたるか。汝等を兵學校に入らしめたるは、他日露國と事ある日、汝等をして之に當らしめん爲である。汝等他事を思はず、刻苦勉勵して、學業を綜へよ。」

と、彼等その言を守りて歸校の途に就いた。後三十餘年、日露戰爭起り彦之丞、露國艦隊を日本海に撃沈し、凱歌を故國に奏するや、曰く

「余の今日あるは、實に、實に南洲先生の賜である」

と。

□早く歸りて人心を鎭撫せよ

九年十月、熊本に神風連の變があつた。當時、南洲は、國分日當山の溫泉に遊んでゐたので、野村忍助、鹿兒島より晝夜兼行馳せて之を南洲に報じた。南洲、謂ふには

「早く歸りて人心を鎭撫し、我が私學校の生徒をして、妄りに附和雷同、輕擧粗暴の行ひなからしめよ」

と。尋で又、萩の亂ありし時も、南洲は溫泉に遊んでゐたが、忍助、馳せて之を報じたが、前同樣の答へであつたので、忍助、歸りて人心を鎭撫し事なきを得たといふ。

□あゝ吾事終れり

十年一月、遂に私學校徒は蹶起した。當時南洲は、巡獵して遠く大隅の大根占より、轉じて國分に至り日當山の溫泉に浴してゐたが、南洲の末弟小兵衛馳せて急を南洲に報じた時南洲は天を仰いで悲嘆し

「あゝ吾事遂に休せり」

と、泫然として涙下り、歸途、肥後某の家に憩ひ、適々兒童の手習するを眺め、筆を把りて一詩を賦した。即ち

白髮衰顏非所意。　壯心橫劍愧無勳。
百千窮鬼吾何畏。　脫出人間虎豹群。

である。

□南洲を信ずる弟從道

十年の初め、私學校徒蹶起の警報が東京に達した時、當時使臣の中に俊才の譽れ高かつた英國公使バークス、馳せて西鄕從道をその邸に訪ひ

「鹿兒島の私學校徒、亂を起したと聞く。西鄕大將の一身實に危し。余思ふに、斯際英國の軍艦を鹿兒島に遣はし、大將を奪ひて難を英國に避けしめては如何」

と、切りに勸めたが、從道は日頃より兄の人格を信じてゐたので

「たとひ、私學校徒、輕擧暴動するとも、兄は斷じて其方向を誤る事はあるまい」

と、遂にバークスの厚意を謝したと。

□田の浦の哀別

十年の役、南洲、鹿兒島出發の際、まだいとけな嗣子寅太郎は、一僕を從へて、袂別の辭を陳べんと私學校に急いだが、南洲、既に出發の後であつたので、其後を追ひ、田の浦に父と面會した。南洲は、寅太郎を抱きあげ

「おゝ、來たか」

と、聲をつまらせ、兩眼には淚を湛へてゐた、やがて、嚴然歸邸を諭したが、寅太郎、聽かずして從ひ行く事半里ばかり、漸く僕の勸告に應じて立ちどまり、松樹のかたはらに消然として、細り行く父の姿を目送してゐた。南洲もまた、幾度か〳〵後を顧み、依々の情に堪へざるものゝ如くであつたといふ。

□舊藩主島津邸前

南洲、私學校徒と共に、舊主島津邸前を過ぐるや、諸隊をして道路に整列せしめ、其居舘に敬禮を爲さしめ、自らは大雪粉々路を埋むる中に跪きて藩主の居舘を拜し、後邸前を過ぎ行きたりといふ。

□兩手を地につきて

十年の役、私學校隊の熊本に達した時、肥後の松崎、高島の二氏、陣營に南洲を訪ふた。南洲は、兩手を地につき、叮嚀に叩頭して徐に口を開き

「私が西鄕吉之助、ごあす。今回の事、一に貴縣を煩はし、實に申譯けごあはん」

と、其態度溫和、其言語慇懃、少しも尊大の風がなかつたので、兩氏大に感じ、深く其人物に推服したといふ。

□戰線を擴ぐべからず

十年の役に、薩軍の諸將、熊本の陣營に評議して謂ふには

「佐賀其他の同志、吾兵の南の關に進出するを待ちて策應せんとす。故に、宜しく敵を追擊して南の關まで進むべし」

と。斯夜、五番大隊長池上貞固、南洲に往て方針を問ふた。南洲、それに答へて云ふには

「戰線を擴ぐれば、農作を荒し、民家を燒き、人民を苦みとならむ、戰は城にて決る。戰線を擴げる事は相成らず」

と。諸隊據て遂に前進を中止したといふ。

□斃れて後やむべし

十年の役、田原坂の戰に、薩軍の兵寡く、勢、敵すべくもなかつた。桐野利秋、急を南洲の營に報じ、援兵を乞ふた。南洲 其使者に謂ふには

「斯戰ひは、もとより死を期してゐるのじや。汝歸りて利秋に傳へよ。殘兵を以て死戰し、斃れて後やむへしと」

使者歸りて之を利秋に傳へた。利秋、駭然手を拍つて

「先生の勇氣斯通りか。斯一言は百萬の援兵を得るに優る」

と、利秋、之を全軍に傳令し、以て決死の勢を示したといふ。

□邊見十郎太に木刀

薩將邊見十郎太、驍悍無雙、其戰陣に臨むや、常に士卒に先立ちて進み、若し敵兵を見て逃ぐる者あらば、後より長刀を揮つて兵士を斬つた。南洲、或日、之を傳へ聞き、早速兵士に命じて木刀を作らしめ、邊見を呼んで之を與へた。邊見、木刀を見て早くもその意を覺り、以後、味方の兵を切らなかつたといふ。

□英雄に閑日月あり

城山籠城後、官軍、日に勢を増し、城中はさながら四面楚歌の窮狀であつたが、南洲は悠々として現狀を知らざるものゝ如く、村田新八等を洞窟に招きて、圍碁に親み、又、折々守備兵士のもとに來て、四方山の話の末、官軍の戰術などを批評し、あるところの戰ひは

「川村純義（海軍中將）の策戰ならん」また、あるところの戰ひは

「山縣有朋の計畫に相違なからん」など〻語り聞かせて打興じ居たといふ。

□軍事は汝に一任しあり

十年の役城山沒落、百事已に休するの時、南洲は悠々テーブルに倚て萬國地圖を披き、潜心熟視して、生命の旦夕に迫るを知らざるもの〻如くであつた。適々桐野利秋、洞窟に馳せ歸りて曰く、
「我軍全部敗れ申した。先生、名策アごあすめえか」
と。南洲、徐に口を開ひて
「戰爭ンこつア、おはんに任せちあつで、おはんが良かごつ仕やい」
（軍事は汝に一任し在り　故に汝の良き樣に爲せ）
と。利秋之をき〻、また一語を謂ふ事が出來なかつたといふ。

□山縣有朋の書

城山陷落の前日、山野田一輔の官軍に使して城山に歸るや、山縣有朋よりの書を出して南洲に呈した。南洲之を一讀し終り
「斯期に臨みて、余又、何をか云はんや」
と。兵士に命じて其書を火中に投じた。

編者註
（左記書簡は一說には、城山陷落後、洞窟にて發見されたとも云ひ　また一說には南洲翁か懷中して居られたともいふ）

辱知生山縣有朋、頓首再拜謹んで西鄕隆盛君の幕下に啓す。有朋が君と相知るや茲に年あり。君の心事を知るや蓋しまた深し。曩に君の故山

に歸臥せしより已に數年、其間謦咳に接するを得ざりしと雖舊朋の感は豈一日も有朋が懷に往來せざらんや。圖らざりき一旦滄桑の變に遭遇し反て君と旗皷の間に相見るに至らんとは。我が歸郷せしより以來、世論の鹿兒島に於ける其異狀を云々するもの概ねみな曰く、西郷其謀主たりと。曰く、西郷は其巨魁たりと。有朋獨り之を然らずとせしに今にして乖離す嗚呼又何をか云はんや。然りと雖も竊に有朋が見る所を以てすれば、今日の事たる勢の已む可からざるに由るなり。君の意志に非ざるなり。有朋よく之を知る。夫れ君の德望を以て鹿兒島縣壯士の泰斗たり。寔に君にして初めより異圖を抱かば何ぞその名なきを憂へんや。何ぞ其機なきに苦まんや。而して今日薩軍の公布する所を見るに、罪を一二の官吏に問はんと欲するに過ぎず。之れ果して擧兵の名義に適したりとせんや。佐賀の賊先に誅せられ、熊本山口の叛徒後に敗れ、天下の士民は漸く自省の志を立てんとす。之果して揭旗の好機を得たりとせんや。君の老練明識豈これを知るに難からんや。而して今日ある君の與り知る所に非ざるを見るに足れり。說者曰く、天下不良の徒は、密に西郷が山林に韜晦せしを奇貨とし、功名を萬一に僥倖するの念を懷き、其時勢に阻隔せるに乘じ、百方其辭を巧にして朝廷の政務を讒誣し、人心離散して黎民其生を安ぜざるが如き妄銳を虛構し、西郷出でずんば蒼生を如何せん。西郷にして義兵を鹿兒島に擧げ、人民の塗炭に墜るを救はんと欲せば、天下皆靡然として之に應ずべしと慫慂せしもの、蓋し一にして足らざるなり。西郷の卓識を以て其虛構たる洞察するに難からずと雖、如何せん浸潤の致す處は衆口以て金を鑠し、遂に西郷をして今日あるに至らしめたりと。聽者皆之を然りとするも有朋獨り之を然りとせず。蓋し君にして此志あらば、單騎にして輦下に乘り、從容利害のある所を上言

するに何の妨あらんや。君固より之を知らざるに非ざるべし。是れ有朋が說者の言を聽いて君の心を得たりとせざる所以なり。顧ふに君が數年育成せし壯士輩は、初めより時世の眞相を確知して天理の大道を履踐するの才識を欠き、或は不良の敎唆に慷慨し、或は一身の轗軻に悒鬱し、不平の怨嗟は一變して悲噴の殺氣となり、再變して砲煙の妖氣となる、君の名望を以てするも尙之を制馭すべからざるに至る。而して其名を問へば即ち曰く、西鄕の爲にするなり。其議を聞けば曰く、西鄕の爲にするなりと、情勢既に迫る斯くの如く夫れ然り。「君が平生故舊に厚きの情空しく此壯士輩をして徒に方向を誤りて死地に就かしめ、獨り餘生を完ふするに忍びず、是に於てか其非なるを知りつゝも、遂に壯士輩に奉戴せられたるに非ずや」然らば即ち今日の事たる君は初めより一死以て壯士輩に與へんと期せしに外ならざるが故に、人生の毀譽を度外に措き、

▽

復た天下後世の議論を顧みざるのみ。噫君の心たる寔に悲しからずや。有朋が君を知るの深きを以て君が爲めに悲しむや亦太た切なり。然りと雖も事既に今日に至る。これを云ふも益なし。君何ぞ早く自ら圖らざるや。交戰以來既に數月を過ぐ。兩軍の死傷日に數百、骨肉相殺し朋友相食む。人情の忍ぶべからざ所るを忍ぶ未だ此戰より甚しきはあらず。而して戰士の心を問へば敢て寸毫の怨みあるに非ず。王師は兵隊の武職により、薩軍は西鄕の爲にすといふに外ならず。夫れ數國の壯士を率ひて天下の大軍に抗し、激戰數旬、挫折し猶未だ撓まず、以て君が威名の實あるを示すに足れり。而して君が麾下の將にして善く戰ふものは槪ね死傷し、薩軍又爲すべからざるや明かなり。將た何の望む所ありてか、徒に守戰の健鬪を事とするや。說者必ず謂はん。西鄕は事の成らざるを知ると雖、其餘生を長くせんが爲に、千百の死傷を兩軍の間に致すを愍まざ

欠

(103) 104 (105 106) 脱

るなりと。有朋固より其然らざるを知るを以て、君の爲に之を痛惜せざるを得ず。願くば君早く自ら圖り、一は此擧が君の素志に非ざるを證し一は彼我の死傷を明日に救ふの計をなせよ。君にして其圖る所を得ば、兵もまた尋で止まんのみ。嗚呼、天下の君を今日に毀譽するや極まれり國憲の存する處は、自ら然らざるを免れずと雖、想ふに君の心事を知る者も亦獨り有朋のみに非ず。何ぞ公論の他年に定まるを慮らざるか。故舊の情に於て有朋切に之を冀望せざるを得ず。君幸に少しく有朋が情懷の苦を察せよ。涙を揮て之を草す。書意を盡さず。頓首再拜。

□終焉の日の南洲

八月十七日未明、薩軍日州長井村の重圍を破り、連戰數回官軍の大兵を支へて鹿兒島に入り、城山に據る。其數僅か五百、時に九月一日な

はるや、三好少將先づ騎馬にて馳せ來り、諸將士に向ひて

「諸君、必ず無禮の事なき樣注意ありたし」

と、諭し、直に之を山縣參軍に報じた。やがて山縣は麾下の將校を從へて岩崎谷に來り、兵卒に命じて首級を洗はしめ嚴然として之に向ひ

「あゝ、翁の顏色、何ぞ溫和なるや。余は二十餘旬よく眠る事能はず、翁の事を氣遣ひ居たり。翁は實に天下の英雄である。翁をよく知るものは余、又、余を知るものは翁である。翁をして今日の終りを取らしめたるは、實に殘念至極である」

と、泫然として涙下り、諸將士と共に心からなる哀悼を捧げたといふ。

欠

三、訓　話

聖賢たらんと欲する志なく、又、古人の事跡を見、迚も企て及ばぬといふ様なる心ならば、戰ひに臨みて逃ぐるより猶卑怯なり。朱子も、白刄を見て逃ぐる者はどうもならぬと云はれたり、單に聖賢の書を讀み、唯个様の言个様の事と云ふのみを知りたるとも、其處分せられたる心を身に体し、心に驗する修業致さずば、何の詮なきものなり。予今日、人の論を聞くに、何程尤もに論ずるとも、處分に心行き渡らず、唯口舌の上のみならば、少しも感ずる心之なし。眞に處分ある人を一れば實に感じ入るなり。身を修し、已を正して君子の体を具ふるとも、處分の出來ぬ人ならば、木偶人も同然なり。

事に當りて思慮の乏しきを憂ふる事勿れ。凡思慮は、平生默座靜思の際に於てすべし。有事の時に至り、十に八九は履行せらるものなり。事に當り、率爾に思慮する事は譬へば臥床夢寐の中、奇策妙案を得るが如きも、明朝起床の時に至れば、無用の忘想に類する事多し。

天下後世迄も信仰悦服せらるゝものは、只是れ一ケの眞誠なり。誠ならずして世に譽めらるゝは、僥倖の譽なり。誠篤ければ、縱令當時知る人無く共、後世必ず知已あるものなり。

人を籠絡して陰に事を計るものは、よし其事を成し得る共、慧眼より之を見れば醜状著しきぞ。人に推すに公平至誠を以てせよ。公平ならざれば、英雄の心は決して攬られぬものなり。

作略は平生致さぬものぞ。作略を以てやりたる事はその後を見れば善からざる事判然なり。予嘗て東京を引上げし時、弟へ向ひ、是迄少しも作略をやりたる事あらぬ故、後は聊か濁るまじ。それ丈けは見れよと申せしとぞ。

平生道を踏まざる人は、事に臨んで狼狽し、處分の出來ぬものなり。譬へば近隣に出火あらんに、平生處分あるものは、動搖せずして取始末もよく出來るなり。平生處分なきものは、只狼狽して中々取始末どころには之無きぞ。夫れに同じにて、平生道を踏み居る者に非ざれば、事に臨みて策は出來ぬものなり。

道を行ふ者は、天下擧げて毀るも足らざるとせず、天下擧げて譽るも足れりとせざるは、自ら信ずるの厚きが故なり。其工夫は、韓文公が伯夷の頌を熟讀して會得せよ。

命も入らず名も入らず、官位も金も入らぬ人は、始末に困るもの なり。此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。されども个樣の人は凡俗の目には見得べからざるなり。

道を行ふ者は、固より困厄に逢ふものなれば、いかなる艱難の地に立

つとも、事の成否身の死生などに少しも關係せぬものなり。事には上手下手あり。ものには出來る人、出來ざる人あるより、自然心を動す人もあれど、人は道を行ふもの故、道を踏むには上手下手もなく出來ざる人もなし。故に只管道を行ひ、道を樂み、若し艱難に逢ふて之を凌がんとならば、愈々道を行ひ、道を樂むべし。予壯年より艱難といふ艱難に罹りし故、今はどんな事に出會ふとも、動揺は致すまじ、それ丈けは仕合せなり。

過ちを改むるに、自ら過つたとさへ思ひつかばそれにてよし、其事をば棄てゝ顧みず、直に一歩を踏み出すべし。過ちを悔しく思ひ、取繕はんと心配するは、譬へば茶碗を割り、其缺けを集め合せ見るも同じにて詮なきものなり。

己を愛するは善からぬ事の第一なり。修業の出來ぬも、事のならぬも過を改むる事の出來ぬも、功に伐り驕慢の生ずるも、みな自ら愛するが爲めなれば　決して己を愛せぬものなり。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己を盡し人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

道は天地自然のものにして、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふ故、我を愛する心を以て人を愛するなり。

學に志すものは、規模を宏大にせずばあるべからず。さりとて唯、此

こにのみ偏倚すれば、或は身を修するに疎になり行く故、終始已れに克ちて身を修するなり。規模を宏大にして已に克ち、男子は人を容れ、人に容れられては濟まぬものと思へよと仰さる。

已に克つた、事々物々時に臨みて克つ様にしては、克ち得られぬなり。兼て氣象を以て克ち居れよと也。

道は天地自然の道なる故、講學の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ。已に克つの極功は「毋(いなし)レ意 毋(ひつなし)レ必 毋(こなし)レ固 毋(がなし)レ我」と云へり。總じて人は、已に克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るぞ。故に已に克ちて、睹ず聞かざる所に戒愼するものなり。

或時「幾經二辛酸一志始堅。丈夫玉碎恥二甎全一。我家遺法人知否。不下爲二兒孫一買中美田上。」との七絶を示されて、若し此言に違ひなば、西鄕は言行反したるとて見限られよと申されける。

萬民の上に位するものは、已を愼み、品行を正くし、驕奢を戒め、節儉を勉め、職事に勤勞して、人民の標準となり、下民其の勤勞を氣の毒に思ふ様ならでは政令は行はれがたし。然るに草創の始に立ち乍ら、家屋を飾り、衣服を文り、美妾を抱へ、蓄財を謀りなば、維新の功業は遂げられ間敷なり。今となりては、戊辰の義戰も偏へに私を營みたる姿になり行き、天下に對し戰死者に對し面目なきぞとて頻りに涙を催されける。

猶豫孤疑は第一毒病にて、害をなす事甚だ多し。孤疑猶豫は義心の不足より發するものなり。故に義を以て事を斷ずれば、其宜しきにかなふべし。何ぞ孤疑を容るゝに暇あらんや。

至誠の域は、先づ愼獨より手を下すべし。閑居即ち愼獨の場所なり。小人は此處萬惡の淵藪なれば、放肆柔惰の念慮起らざるを愼獨とは云ふなり。是善惡の分るゝ處なり。心を用ゆべし。

變事俄に到來し、動搖せず、從容其變に應ずるものは、事の起らざる今日に定まらずんばあるべからず。變起らば只それに應ずるのみなり。古人曰く「大丈夫の胸中灑々落々。光風霽月の如く、其自然に任す、何ぞ一毫の動心あらん哉」と。是即ち標的なり。此如き体のもの何ぞ動搖すべきあらんや。

剛膽なる處を學ばんと欲せば、先づ英雄の爲す處の跡を觀察し、且つ事業を翫味し、必ず身を以て其事に處し、安心の地を得べし、然らざれば只英雄の資のみあつて、爲す處を知らざれば眞の英雄と云ふべからず是故に、英雄の其事に處する時、如何なる膽略がある、又、我の事に處するところいかなる膽略ありと試較し、其及ばざるもの、足らざる所を研究勵精すべし。思ひ設けざる事に當り、一点動搖せず、安然として其事を斷ずる所に於て、平日養ふところの膽力を長ずべし。常に夢寐の間に於て、我膽を探討すべきなり。夢は念ひの發動する所なれば聖人も深く心を用ひるなり。周公の德を慕ふ一念旦暮止まず、夢に發する程に厚からん事を希ふべし。寤寐の中、我々の膽、動搖せざれば、必ず驚懼の夢

を發すべからず。是を以て試み、且つ明むべし。

妖壽とは、命の短きと命の長きといふ事なり。是が學者工夫上の肝要なる處、生死の間落ち着き出來ずしては、天性といふ事相分らず。生きてあるもの一度は是非死なでは叶はず。とりわけ合点の出來そうなものなれども、凡そ人、生を惜み、死を惡む。是れ皆、思慮分別を離れぬからの事なり。故に慾心といふもの仰山に起り來て、天理といふ事を覺ることとなし。天理といふ事が慥に譯つたらば、壽殀何ぞ念とする事あらんや。只今生れたりといふ事を知つて來たものでないから、いつ死ぬといふ事を知らふ筈がない。それじやに因て死と生といふ譯がないぞ。さすれば生きてあるものでもないから、思慮分別に渉る事がない。そこで生死の二つあるものでないと合点の心が疑はぬといふものなり。この合点が出來れば、これが天理のあり處にて、爲す事も、云ふ事も一つとして天理にはずることはなし。一身がすぐに天理になりきるなれば、是が身修まるといふものなり。そこで死ぬといふ事がない故、天命の儘にして、天より授かりしままで復すのじや。少しもかはる事がない。天と人と一体といふものにて、天命を全ふし終ふしたといふ譯なればなり。

（右は文久二年沖永部島牢居中、孟子の殀壽不レ貳　修レ身以俟レ之。所三以立二レ命也。を講じて村童に與へたるものなりといふ）

一　道同じく、義相協ふを以て暗に集合せり。故に此理を益々研究して道義に於ては一身を顧みず、必ず踏み行ふべき事。

二　王を尊び民を憐むは學問の本旨なり。されば此天理を究め、人民の義務に臨みては、一向確に當り、一同の義を立つべき事。

（右二ヶ條は私學校綱領として　南洲が手記し　本分各校に與へたるものなり）

四、書　簡

……以上省略……江戸風の浮氣には相當り申さず候に付き、それ丈けは御安心可被下候。一緒に參り候人々の內、品川へ足踏み致さずは一人にて御座候。是位ひに續く人は御座なく候得共、とろけは仕らず候……

……下略……

（右は安政元年　南洲二十八才　藩主齊彬公に扈從して江戸に上りし當時母方の叔父椎原兄弟に寄せたるものの一節なり）

……（以上省略）……大守様　俄に御發病、大小用も御床の内にて……（略）……又　若殿様には去る二十三日晝九つ時より御瀉しにて晝の内十二度、夜二十五度位の儀にて、八つ時終に御卒去遊ばされ候段我々式は、翌日承知候位にて残念いかんとも申様のあるものにて御座なく候。思へば思へば、怒髮、冠を突き候。大守様にも斯上御煩ひ重り候ては誠に暗の夜の中と……（略）……目黒の不動へ參詣致し、命に替て祈願をこらし、晝夜祈り入事に御座候。つらつら思慮仕候處、いづれなり奸女を殪し候外望なき時と伺ひ申居候。御存じの通り身命なき拙者に候へば、死する事は塵埃の如く、明日を頼まぬ儀に御座候間。いづれなり死の妙所を得て天に飛揚致し御國家の災難を除き……（以下省略）

…………

（安政元年　江戸にて藩主齊彬公發病　尋で世子虎壽丸夭折し　即ち呪咀毒殺の風説ありしかば　南洲　大に憤慨す　右はその當時　在藩の同志　福島矢三太に寄せたるものなり）

……（以上省略）……大島に罷在り候節は、今日は今日はと相待ち居候故、痼癪も起り一日が苦になり候處、此度は徳之島より二度と出で申さずと諦め申候故、如何の苦も無之安心なものに御座候。若し惑亂に相成候はば、その節は罷り登るべく候へども、平生に候はば誓ひ御赦免を蒙り候ても滯島相願ひ可申含に御座候、骨肉同様の人々さへ唯事の眞意を問はずして罪に落し、又有朋も悉く殺され、何を頼みに致すべく候や老祖母一人有之、是計り氣掛りと相成居候處、大島より罷登り候節は存命致居候て滿悅致候に就き、最早氣掛りも無之、罷り登り候てより死去仕候につき何の心置くこと無之、迚も我々位に補ひ立候世上にては無之

候間　馬鹿らしき忠義立は受止申候……（下略）……

（右は德之島より鄕里の木場傳内に寄せたるものなり）

……（以上省略）……さて此二日の大地震は、前古未曾有にて、御同樣杖とも柱とも賴に致居候、水戸の藤田、戸田の兩雄も搖り打ちに逢はれ、黃泉の客と成られ候始末、如何にも痛烈之至り、何事もこれぎりと明け暮れ愁悒嗟嘆相極め居候。御深察可被下候。

（安政二年十月二日　江戸大地震あり。藤田東湖等震死す。右は當時の大久保利通に寄せられたるものなり。）

……（以上省略）……書物讀み弟子二十人ばかりに相成り、至極の繁榮にて、鳥なき里の蝙蝠とやら、朝から晝までは素讀、夜は講釋とも仕りて、學者のあんばいにて獨り可笑く御座候、然乍ら學問は獄中の御蔭にて上り申候。御一笑成し下さる可候。手拭、年頭の祝儀に段々貰申候間、御祖母樣え進上仕候間、御笑納可被成下候……

（右は元治元年　沖の江良部島の獄中より　叔父椎原兄弟に寄せたるものなり）

……（以上省略）……陳者年　年亡父拜借金いたし居り、其後私共にも度々の災難に逢ひ、一向挨拶なども致さず、其儘に打過ぎ居候次第何とも申譯なき仕合、亡父に對して相濟ぬ事に御座候處、御承知も下され候半　昨年出京仕候處、容易ならぬ重職を蒙り、何とも恐入り候次第に御座候。……（略）……斯度歸省に就ては、是非亡父の思ひ煩ひ居候儀を、相解き度き念願に御座候て……（略）……元利相揃へ差上候

こそ相當の譯に御座候得共、只今迚も多人數の家內を相抱へ居候上……
……（略）……右に就ては本金二百兩の場に、數十年の利息相掛り居候へ
ば、過分の金高に及び候義に御座候得共……（略）……纔に二百金丈
け只利息の心持を以て……（略）……然れば亡父の靈魂をも安ぜし
め……（下略）……

（右は明治四年上京して木戶孝允　板垣退助等と共に參議に任ぜられ　翌五年　明治天皇に供奉して鹿兒島に入り　亡父數十年前の舊債金二百金を板垣與三次なる者に返濟せし時の書簡なり）

先刻御引合相成候、肥後鎭台に懸合の一條、縣廳間違にて掛合いたし候儀を申分り、早々御取消可被成下候、彌御掛合相成候はば何分の御知らせ可被下候。其邊又々間違候へば、先鋒の兵隊如何の事變に及候哉も不被知候に付き、念の爲め又々申進候。以上

明治十年二月十六日　西郷吉之助

今藤宏様

（右は明治十年二月　鹿兒島出陣の前々日　鹿兒島縣令大山綱良の、專使を以て熊本鎭台に照會したる

> 拙者儀今般、政府に尋問の廉有之、明後十七日縣下發程、陸軍少將桐野利秋、陸軍少將篠原國幹及び舊兵隊の者共隨行致候間　其台下通行の節は兵隊整列指揮を可被受、斯段照會に及候也
>
> 明治十年二月十五日　陸軍大將　西郷隆盛
>
> 熊本鎭台司令長官

と、謂ふ右照會文を不隱當とし縣官今藤宏に宛取消を請求したる書簡なりと云ふ。）

五、詩文

我家松籟洗塵緣　滿耳清風身欲仙。
誤作京華名利客　不聽此聲已三年。

幽居夢覺淡茶烟　靈境溫泉洗世緣。
地古山高靜於夜　不聞人語只看天。

銜雨來叩雲外門。風光滿目對吟樽。
相逢高與無他事　山水幽情仔細論。

山老元難滯帝京。絃聲車響夢魂驚。
垢塵不耐衣裳汚　村舍避來身世清。

驅犬銜雲度萬山。傲然長嘯斷崖間。
請看世上人心險。涉歷艱於山路艱。

朝蒙恩遇夕焚坑。人世浮沈似晦明。
縱無回光葵向日。若不開運意推誠。
洛陽知己皆爲鬼。南放俘囚獨竊生。

生死何疑天附與。　願留魂魄護皇城。

一貫唯々諾。從來鐵石肝。　貧居生傑士。
勳業顯多艱。耐雪梅花麗。　經霜楓葉丹。
若能識天意。豈敢謀自安。

幾經辛酸志始堅。　丈夫玉碎恥甎全。
我家遺法人知否。　不爲兒孫買美田。

天步艱難繫獄身。　誠心豈莫恥忠臣。
遙追事跡高山子。　自養精神不咎人。

百戰無功半歲間。　首邱幸得返家山。
笑儂向死如仙客。　盡日洞中棊響閑。

世上毀譽輕似塵。　眼前百事僞耶眞。
近思孤島幽囚樂。　不在今人在古人。

精神不減若人情。　專觀君恩壯氣橫。
開眼營船眞意顯。　揮淚霑僕俗緣輕。

北堂庭訓能應奉。先祖忠勤富力行。
畢生勉乎酬國事。無私純志挺群英。

別離如夢又如雲。欲去還來涙紛紜。
獄裡仁恩謝無語。遠凌波浪瘦思君。

宦居逃去遠搜奇。神嶺幽情筆硯隨。
誰識浴餘行樂處。青山高豁宿雲披。

酷吏去來秋氣清。雞林城畔逐涼行。
須比蘇武歲寒操。應擬眞卿身後名。
欲告不言遺子訓。難離難忘舊同盟。
故天紅葉凋零日。遙拜雲房霜劍橫。

一

獨不適時情。豈聽歡笑聲。雪羞論戰略。
忘義唱和平。秦噲多遺類。武公難再生。
正邪今那定。後世必知淸。

如今我守古之愚。深信交情世俗異。
戲謔自然雜規誨。杯樽隨意極歡娛。

同胞固慕蘭田約。　談笑遂非竹林徒。
此事平生與誰語。　願令衰老出塵區。
明籌奇策不可模。　正勤王事是眞儒。
懷君一死七生語。　抱此忠魂今有無。

吁嗟難舍范蠡功。　失命投機志氣雄。
十字血痕在花色。　龍顏一笑認孤忠。
建業唯期華盛頓。　鬪爭獨翼翁破翁。

半宵提劍望寒月。　今古興亡在眼中。

世俗相反處。　英雄都相親。　臨難無苟免。
見利勿全循。　齊過沾之己。　同功售之人。
平生偏勉力。　終始可行身。

大正十五年九月二十日印刷
大正十五年九月二十五日發行
大正十五年十一月十日改訂八版發行

（定價參拾錢
郵稅貳錢）

編輯兼發行者　鹿兒島市武町一六一　茂　秀　詮

印刷者　鹿兒島市山下町一　永　山　政　規

印刷所　鹿兒島縣教育會印刷部　電話九九七番

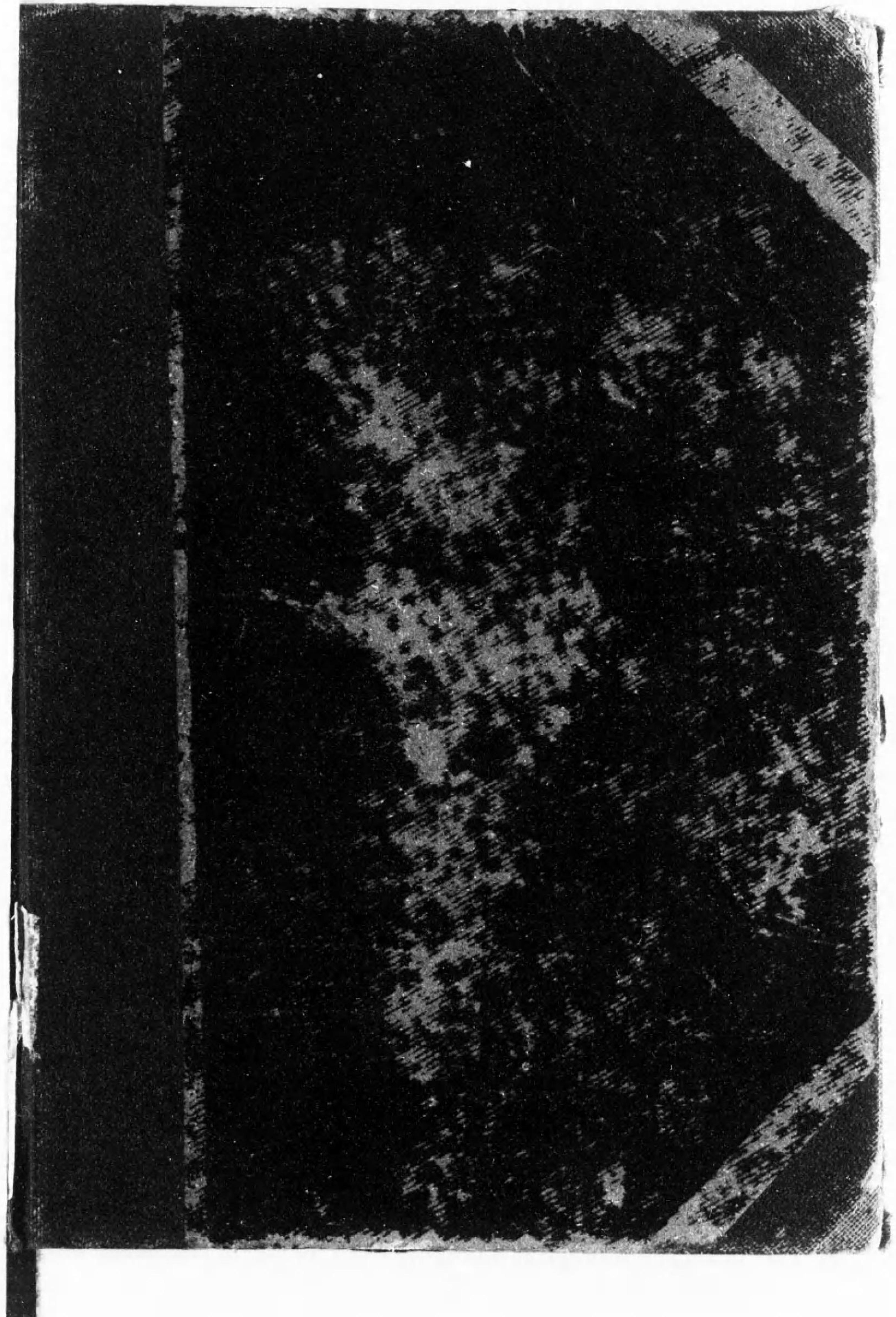
不許複製

發行所　鹿兒島市城山岩崎谷洞窟　南　洲　會
振替福岡一〇〇三五番

550
129

拝啓
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

550
129ч

終